

第55回

岡山県学校図書館研究大会

高梁・新見大会

大会テーマ

豊かな心と主体的に学びに向かう力を育てる学校図書館



雲海の松山城

令和5年8月18日（金）

高梁総合文化会館

高梁市文化交流館

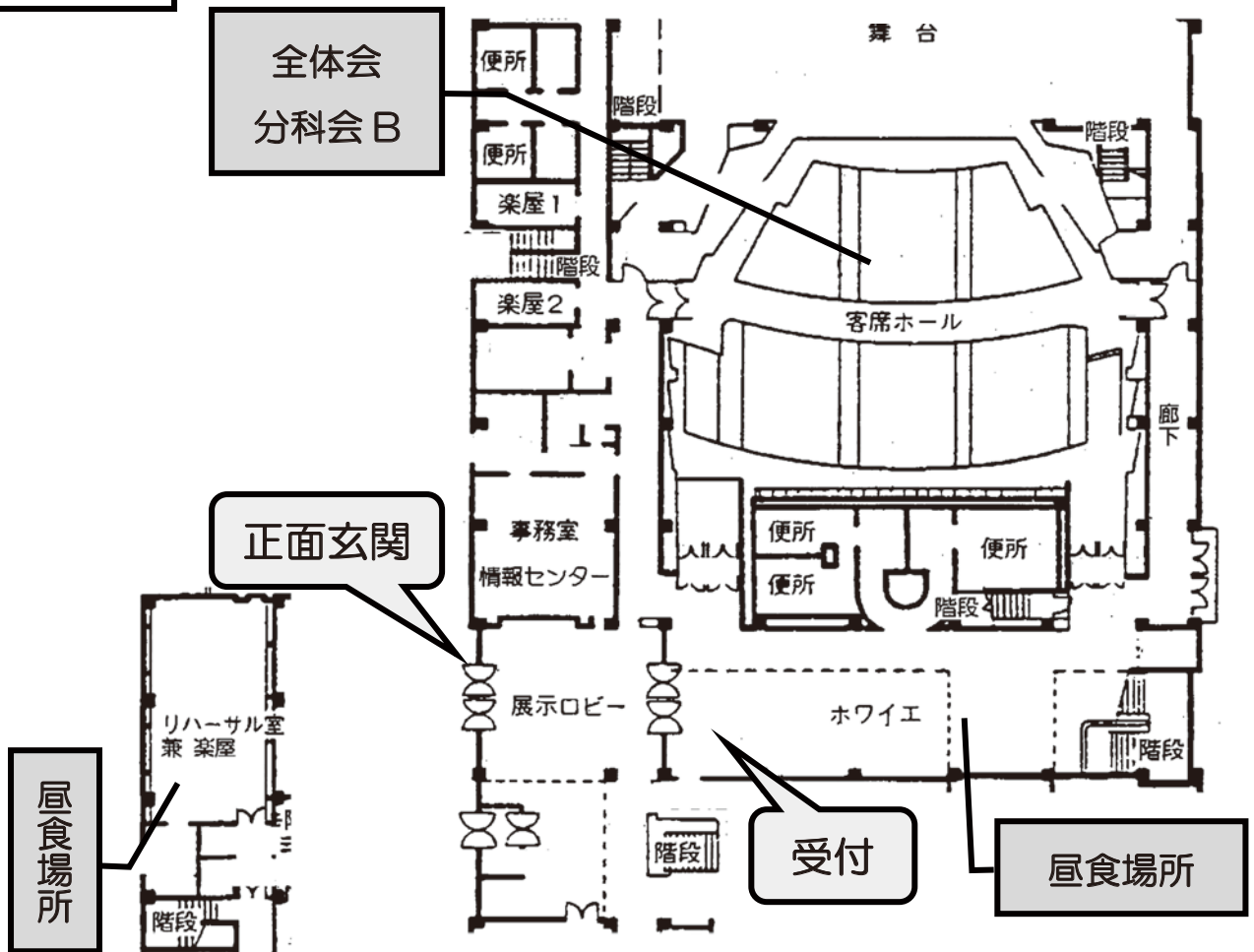
岡山県学校図書館協議会

目 次

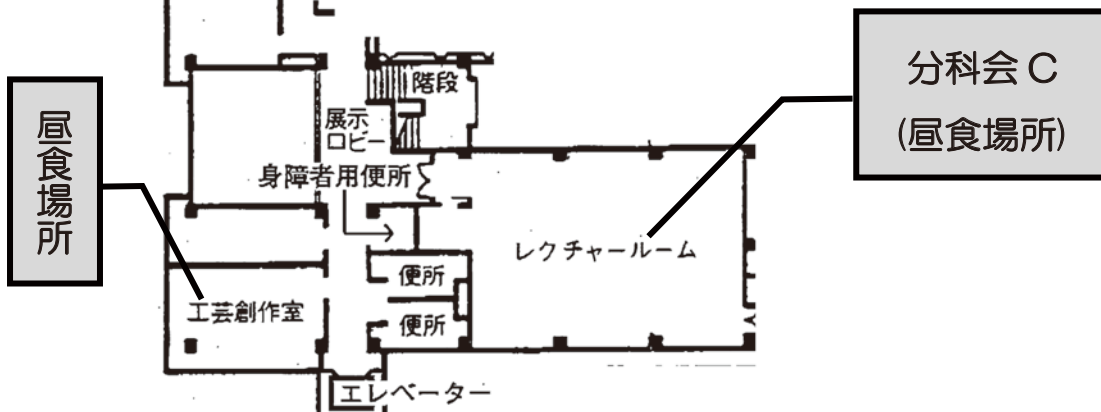
会場案内	1
ごあいさつ	3
開催要項	4
講 演	5
分科会一覧	6
分科会発表一覧	
【分科会A】	7
【分科会B】	17
【分科会C】	25
【分科会D】	31
大会役員 大会実行委員	33

会場図

【高梁総合文化会館】 1階



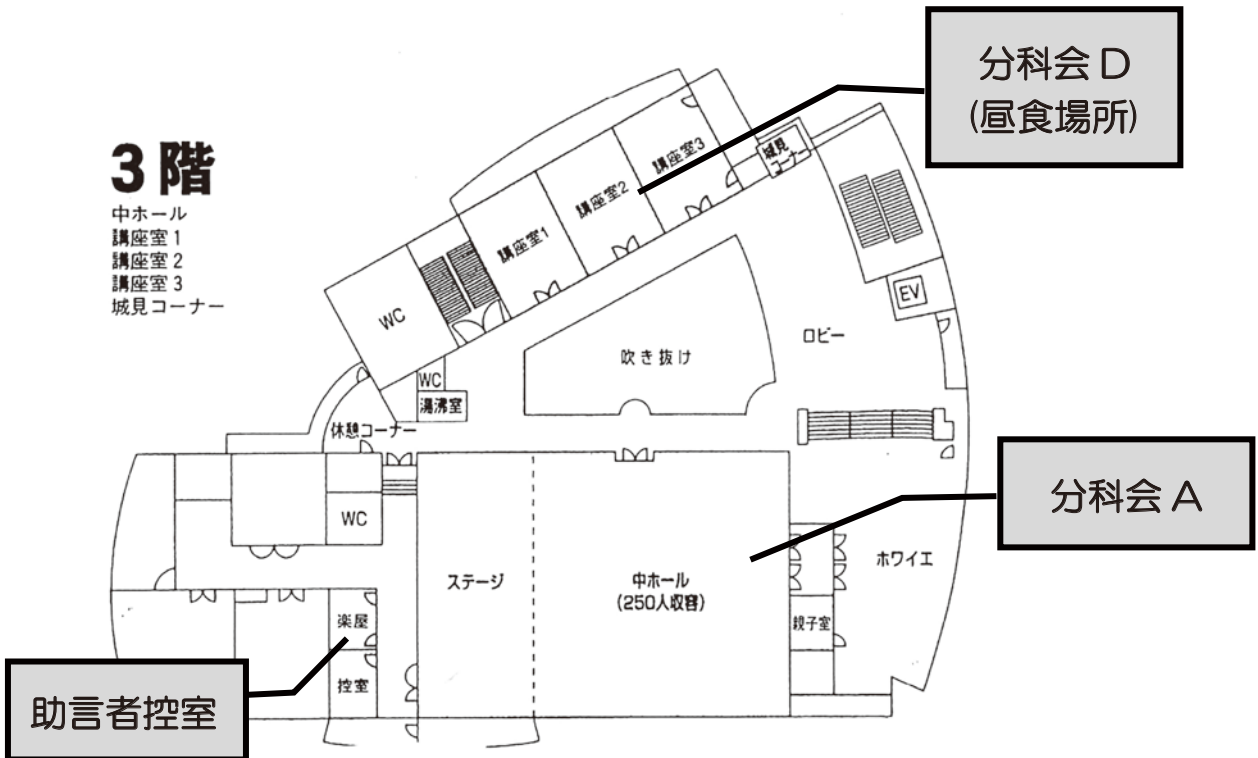
【高梁総合文化会館】 2階



【高梁市文化交流館】

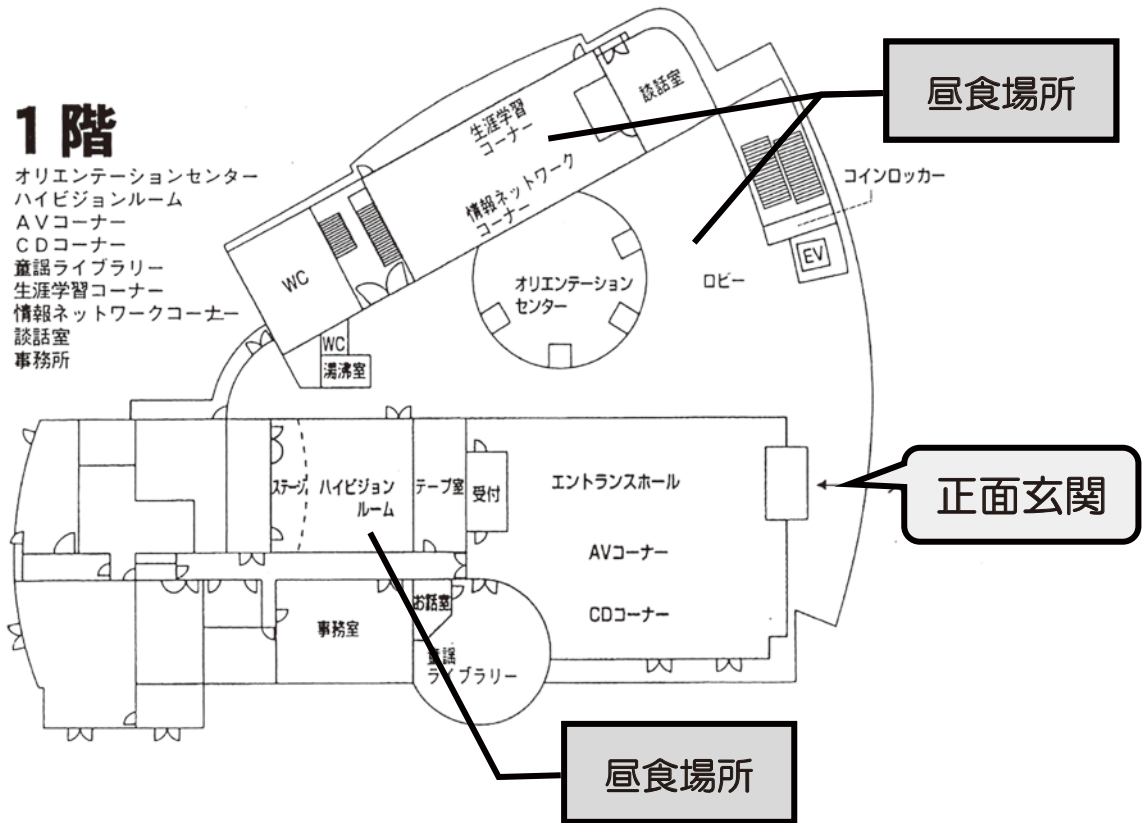
3階

中ホール
講座室1
講座室2
講座室3
城見コーナー



1階

オリエンテーションセンター
ハイビジョンルーム
AVコーナー
CDコーナー
童謡ライブラリー
生涯学習コーナー
情報ネットワークコーナー
談話室
事務所



ごあいさつ

岡山県学校図書館協議会

会長 藤井省吾

大会テーマ「豊かな心と主体的に学びに向かう力を育てる学校図書館」のもと第 55 回岡山県学校図書館研究大会（高梁・新見大会）を開催できますことを、大変嬉しく思っております。皆様方におかれましては、平素より学校図書館の魅力増進や児童・生徒の読書活動にご尽力いただき感謝申し上げます。

前回大会の第 54 回大会は、開催に向け準備を進めておりましたが、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、誌上開催となりました。この 3 年間、本大会だけでなく、様々な行事が中止もしくは縮小を余儀なくされたところですが、本年度は、5 月に感染症 5 類へ移行されたことに伴い、このように参集する形式で実施することができました。前回大会が誌上開催になったことで、本大会の準備の方も例年になく大変であったと思います。あらためて、準備・運営にあられた関係者の皆様のご苦勞に感謝申し上げます。

さて、豊かな心、つまり他人を思いやる心、生命や人権を尊重する心、自然や美しいものに感動する心などの育成には体験的な学習が必要となります。読書は体験であるとも言われています。実際、読書で登場人物に感情移入しているときの脳は、体験しているときの脳と近い動きをしているという話もあるようです。また、主体的な学びにおいては PBL、いわゆる課題解決型学習の有用性が言われており、課題研究や探求的な学習において学校図書館の役割はますます大きくなってきております。

また、現在、岡山県では 2019 年から概ね 5 年間とされる「第 4 次岡山県子ども読書活動推進計画」が進行中です。重点的な取組として、児童生徒の自主的な活動の充実（学校図書館の計画的な利活用）があげられています。

このように学校図書館の求められる役割が大きくなる中で本研究大会を開催する意義は誠に大きいものがあります。益井博史先生のご講演、そして 4 つの分科会の協議を通じて小中高の情報共有や相互の連携体制がより進展することを期待しているところで

最後になりましたが、岡山県教育委員会をはじめ、ご支援とご協力を賜りました多くの皆様に厚く御礼を申し上げましてごあいさつとさせていただきます。

開催要項

- 1 期 日 令和5年8月18日（金）
- 2 会 場 高梁総合文化会館
〒716-0043 高梁市原田北町 1212 TEL:0866-22-1040
高梁市文化交流館
〒716-0043 高梁市原田北町 1203 TEL:0866-22-0180
- 3 主 催 岡山県学校図書館協議会
- 4 共 催 岡山県小学校教育研究会 岡山県中学校教育研究会
岡山県高等学校教育研究会
岡山教育事務所管内図書館協議会 備中地区高等学校図書館協議会
- 5 後 援 岡山県教育委員会 高梁市教育委員会
新見市教育委員会 岡山県市町村教育委員会連絡協議会
岡山県読書推進運動協議会 全国学校図書館協議会
- 6 大会テーマ 「豊かな心と主体的に学びに向かう力を育てる学校図書館」
- 7 趣 旨

新学習指導要領にも示されているように、生きて働く「知識・技能」、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」を3本柱に学校現場で育成すべき力は多岐にわたっている。自己の感情や行動を統制する力や自らの思考の過程等を客観的に捉える力、多様性を尊重する態度と互いのよさを生かして協働する力など、多くの力を育成する必要がある。そのために、学校の「知の拠点」である学校図書館が果たす役割は大きく、家庭・地域との連携、ICTの活用、司書教諭と学校司書の協働した学校図書館運営の充実とともに、教科と連携した学校図書館の幅広い資料、情報、蔵書を活用した多様な学びが必要である。また、国においては第5次「学校図書館図書整備等5か年計画」が策定され、新学習指導要領が求めている主体的・対話的で深い学びの実践の場として、学校図書館が期待されている。

これまで教育現場では、時代と共に求められる本が変化してきた。受け継がれていくべき本や、今必要とされている本について更新や廃棄を正しく見極め、カリキュラムに沿って必要な本をそろえることが求められる。超スマート社会に向けて、今後はデジタル資料も取り入れていく必要があり、同時にアナログ資料も有効活用できる環境を整えることも大切である。また、さまざまなメディアがある中で、メディアに対応した読む力（読み方のリテラシー）も重要になってくる。

このように時代は予測不能な速さで変化しているが、子ども達に有益な図書や学校図書館の存在が、幼児・児童・生徒の心を育むこと、これからの時代に求められる主体的な学びを支えることに大きく貢献すること、すなわち子ども達に未来を切り拓き、生きる力を身につけていく上で重要な役割と位置を占めていることは、今までもこれからも変わることはない。

本大会では、こうした学校図書館がもつ役割や使命を再確認し、幼児・児童・生徒の豊かな感性や情操を育む学校図書館の在り方、自ら課題を見つけ、主体的に探究し、学びを深めていく「主体的・対話的で深い学び」を支える学校図書館の在り方等について、4つの分科会で発表される研究発表を通して研修を深め、学校図書館のさらなる充実を目指していきたい。

8 日 程

9:30	10:00	10:40	12:10	13:00	15:40
受付	開会行事	講 演	昼食・移動	分科会	

- 9 講 演 演 題 『ビブリオバトルが拓く読書とコミュニケーションの可能性』
講 師 一般社団法人ビブリオバトル協会
ビブリオバトル普及委員会理事 兼 関西・中国地区代表
益井 博史 先生

講演

演題 『ビブリオバトルが拓く読書とコミュニケーションの可能性』

講師 一般財団ビブリオバトル協会

ビブリオバトル普及委員会理事 兼 関西・中国地区代表

益井 博史 先生

第55回岡山県学校図書館研究大会 高梁・新見大会 分科会一覧

分科会	A	B	C	D
テーマ	「学校図書館の運営・連携」	「豊かな心を育み、読書の楽しさを味わわせる学校図書館」	「主体的に学ぶ力を育てる学校図書館」	「心をつなぐ絵本」
小学校	<p>豊かなつながりを大切にして学びを創る子どもの育成 ～学校図書館の機能を活かした知的創造の場をめざして～</p> <p>【発表者】共同発表 岡山市立西小学校 教諭 大田 真衣 岡山市立芳泉中学校 学校司書 大橋 昭子</p> <p>子どもの知的創造をひろげる 学校図書館をめざして ～図書館と連携した授業づくり～</p> <p>岡山市立御南小学校 教諭 久富明日香 教諭 石井希久代</p> <p>児童の思いや願いをかなえる 学校図書館</p> <p>【発表者】 玉野市立後閑小学校 教諭 郁田 真三</p>	<p>子どもを本に近づける 手立ての工夫</p> <p>【発表者】 真庭市立北房小学校 教諭 安田 京幸</p>	<p>主体的な学びを生み出す 授業をめざして ～「知りたい」「読みたい」「伝えたい」を引き出すために～</p> <p>【発表者】 倉敷市立老松小学校 教諭 松本 啓子</p>	<p>心をつなぐ絵本 ～SDGsとつながる絵本～</p> <p>【発表者】 倉敷市立福田南中学校 教諭 山田 宏美</p> <p>図書館活動及び絵本の紹介</p> <p>【発表者】 高梁市図書館 副館長 有富 哲矢 新見市立中央図書館 館長補佐兼係長 西村 康子</p>
中学校	<p>読書活動推進に向けて ～連携の取組から～</p> <p>【発表者】 笠岡市立笠岡西中学校 教諭 笠原由利子</p>	<p>読書の輪を広げるために ～図書委員会・国語科の取組～</p> <p>【発表者】 岡山市立御南中学校 教諭 太田理恵子 わくわくする学校図書館を めざして ～本に親しむ生徒の育成～</p> <p>【発表者】 赤磐市立高陽中学校 教諭 遠藤真理枝 学校司書 吉次真由美</p>	<p>図書委員会と連携した 読書推進活動</p> <p>【発表者】 鏡野町立鏡野中学校 教諭 山崎亜紀子 学校司書 妹脊多郁子</p>	
高等学校	<p>津山モデルを活用した 学校図書館運営 ～美作支部の取組から～</p> <p>【発表者】 岡山県立津山工業高等学校 学校司書 竹内英里香</p>	<p>確かな論理的思考力と 豊かな情操を育む読書指導 ～中高6学年を通じた 帯活動の実践～</p> <p>【発表者】 ノートルダム清心学園 清心中学校 清心女子高等学校 教諭 太田菜津子 司書 野崎 敦子</p>	<p>生徒の主体的な活動による 図書館利用の推進</p> <p>【発表者】 岡山県立津山高等学校 教諭 立山千亜紀</p>	
助指 言者 導	高梁市教育委員会 こども教育課係長 平松 敬子	新見市教育委員会 学校教育課指導係主査 津島 左知	倉敷市教育委員会 学校教育部指導課指導主任 野口 泰紀	新見市立中央図書館 館長 藤森 貴広
司会者	笠岡市立新吉中学校 教諭 三宅 直子	赤磐市立赤坂中学校 主幹教諭 金谷 優子	倉敷市立老松小学校 教諭 平松 芙美	新見市立神代小学校 教諭 宮長 和未
記録者	高梁市立高梁小学校 教諭 河本 有彩	新見市立新見第一中学校 教諭 西村 展子	倉敷市立柏島小学校 教諭 寺岡美紗子	新見市立野馳小学校 教諭 石本 倫子
運営 責任者	高梁市立高梁東中学校 教諭 上原 和賀	新見市立新砥小学校 教頭 光島 知里	倉敷市立琴浦中学校 教諭 吉川 里美	新見市立神代小学校 教諭 宮長 和未

豊かなつながりを大切にして学びを創る子どもの育成
～学校図書館の機能を活かし知的創造の場をめざして～

岡山市立西小学校 教諭 大田 真衣
岡山市立芳泉中学校 学校司書 大橋 昭子

1 はじめに

本校は、児童数 1200 名を超える県内でも有数の大規模小学校。3 年生以上は 1 時間に 2 クラスずつ利用するなど工夫しながら年間約 900 時間の図書館利用がある。一人当たり年間貸出し冊数は 80 冊強。各学年とも様々な学習で図書資料を活用している。

このような図書館利用の背景には、学校図書館の機能を活かすためのさまざまな“つながり”（連携）がある。学校図書館の働きの根幹となる「資料提供」を、子どもたちに・教職員間にもどのように“つなげる”取組（運営）をしてきたか、実践を紹介する。

2 具体的な取組

（1）授業との連携の場面で

各学年の学習活動とともに、様々な形態で授業との連携が行われている。

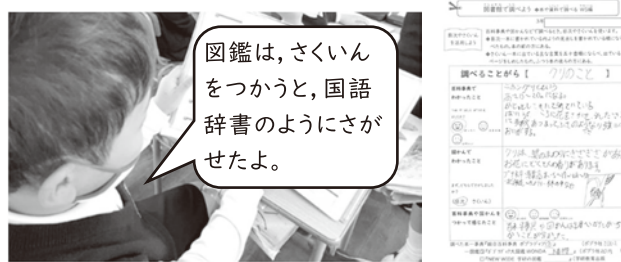
① 3 年生の事例から

□国語科「目次やさくいんを活用しよう」

図鑑と百科事典を利用して引き比べを行った。子どもは二人一組になり、図鑑と百科事典のセットを用いて「ライオン」や「コスモス」など、同じ見出し語について調べる。図鑑では「つめ」や「はしら」を、図鑑では「目次」や「索引」を用いて調べて、分かったことをワークシートにまとめ、引き比べた感想を書くという活動である。

事前に学習内容を学校司書に相談し、調べる見出し語を指定した図鑑と百科事典とをセットにした図書資料の提供を受けた。子どもは相手と協力しながら見出し語について調べ、途中から図鑑と百科事典を交換して読み比べる。図書資料の準備だけでなく、説明用のプレゼンテーションやワークシート等も準備したことで、子どもたちは学習の流れをつかみ

やすく、調べたことがらをまとめる活動を通じて、「図鑑は絵が多かったな。」「同じことを調べても、書かれている内容は違うんだな。」等に気付くことができた。



□総合的な学習の時間「ヤゴ救出大作戦」
学校のプールから救出したヤゴを飼育する活動のために、グループごとに「ヤゴの飼い方」や「ヤゴの種類」、「ヤゴのひみつ」等、調べる題材を設定し、図書資料を用いて調べた。調べて分かったことを、「紙芝居」や「観察日記」、「図鑑」、「新聞」、「模型」等に表示し、クラス内で発表をしたり、2 年生へ紹介したりした。いずれの場合も学習前に学校司書と相談や打ち合わせを行い、授業後には提供された図書資料が適切であったかを振り返った。

□他にも様々な教科や単元で図書資料の提供が行われた。図書資料だけでなく、雑誌や新聞の切り抜き資料、動画へアクセスできる QR コードなど、それぞれの学習の内容に合った様々な情報媒体の提供を受けた。

② 連携を支える資料提供

資料提供時には学習の導入に活用できる図書資料に加え、必要に応じて百科事典も学年貸出したり掲示資料を学年の教室の近くにある掲示板など図書館外にも貼ったりするなど、学習環境整備の一助となるよう工夫している。また、小学生新聞の特集記事や地方新聞で紹介される地元ならではの情報切り抜き資料も作成・提供している。

(2) 司書教諭と学校司書との連携

① 運営

各学年から出される図書資料活用の情報を共有。図書館からの広報紙に、図書館資料を活用した学習の様子・作品の紹介記事を積極掲載するなど、図書館の機能を家庭に発信することを相談しながら行っている。

② 蔵書構築

自校の長期・中期の図書整備計画に基づき蔵書を整備している。令和2年度から岡山市では国語の採択教科書会社に変更されたことに伴い、資料整備計画にも大きな変更が生じた。その際には、司書教諭と学校司書で各校に回覧された教科書の実物を一緒に見ながら、現在の蔵書で活用できるもの・新たに整備をしていくものを見通しをたてることができた。

③ 学期ごとの活動報告

学校図書館の活動について学期ごとに総括し、司書教諭・学校司書それぞれの視点から報告している。司書教諭からは、学習活動に関わる実践や委員会活動を中心に、学校司書からは利用状況や資料整備状況、日々の子どもの様子などを報告し、学校全体での図書館活動の共有化を図っている。

(3) 中学校区の研究テーマとの連携

① 週替わりのテーマ展示・資料紹介を継続することで、子どもたち自身がさまざまな角度から人・自然・社会に関心をもち、主体的にかかわるきっかけ作りをしている。子どもたちの日常の読書や自主学習につながる場をたくさん見ることができている。

② コロナ禍であっても絵本を投影することで、密にならずにお話を“目で聴き”楽しんだ。図書館の機能を学ぶ単元「図書館へ行こう」の学習を教室でも行えるとともに、本の分類や図書館内の工夫を“目で聴く”ことができるよう、授業者と学校司書とで打ち合わせをしてプレゼンテーション資料を作成し活用した。

(4) 児童図書委員会活動との連携

おすすめの本紹介や資料活用の実際を知らせるなど図書委員会の活動も、子どもと資料をつなぐ大切な場である。

① 行事・季節に合わせた本の紹介

本のPOP作り・テーマに合わせたコーナー

作りなど、図書館という場で本の魅力を知らせる方法に加え、Chromebookのクラスルームの活用を始めた。投稿した本の紹介カード(POP)・本の紹介スライドなどを事前に各教室で見ってもらうことで、紹介された本について興味を持ち、目的をもって図書館利用をする姿が見られるようになった。

② 作品(情報カード)募集の事例

利用者から本の魅力を発信してもらう手段として、自由なテーマで本を使って調べ、わかったことを記入した情報カードを読書週間企画として募集し、作品を掲示・交流した。

(5) 「チーム西小学校」としての連携

① 教職員で協力し行う図書館行事

潜在的な資料要求を引き出したり、新たな体験を資料につなげたりできるような取組としての図書館行事は、主に夏休み開館日に各学年の図書館教育部員と共に計画・実施している。コロナ禍では、規模の縮小を余儀なくされたが、教職員によるお話コンサート・落語の会などを実施している。

② 読み聞かせボランティアの活動

朝読書の時間を活用し、定期的に読み聞かせボランティアが来校する。季節のおはなしや子どもの興味関心を呼び起こす本の読み聞かせを長年継続している。

(6) 学校司書部会研修との連携

月1回の学校司書部会研修での学校司書同士の研修も、自校の図書館活動に還元している。令和4年度は研修成果物『小学校 図書館情報活用シート』(情報の扱い方を場面ごと、学びのプロセスごとにまとめた資料)を調べ学習の際などに活用し、その実践例を学校司書部会研修で紹介したり、他校での活用例を自校で取り入れたりした。

3 おわりに

3年生のトンボ調べ発表を聞いた2年生がトンボの本を探しに來たり、4年生が福祉の学習で調べた作品『UD 図鑑』を関連資料と共に展示すると、その両方を手に取ったりする子どもたちがいた。使われた資料が、子どもの学びや作品を通じて、次の資料活用につながっていく。学校図書館が、様々な連携を通して知的創造の場になることを願っている。

子どもの知的創造をひろげる学校図書館をめざして ～図書館と連携した授業づくり～

岡山市立御南小学校 教諭 久富 明日香
教諭 石井 希久代

1 はじめに

本校では、学校目標「ともに支え合い、心豊かにたくましく生きる児童を育成する」をもとに、研究主題「豊かなつながりの中で、自分の考えを広げたり深めたりする子どもの育成」を目指して、様々な授業の実践に取り組んでいる。そこで、国語科においては、児童の知的創造を広げるために、図書資料を活用して、中心教材の授業でつけた力を第三次に深め、伝え合うことができるように、学校司書と連携をした授業づくりを行った。

2 具体的な取組

単元名 くらべてよもう

「子どもをまもるどうぶつたち」

(東京書籍 1年下)

(1) 単元について

本教材は、動物は子どもを守るためにどのような行動をとっているのかについて、オオアライクイとコチドリを例に説明した文章である。登場する動物の特徴や子どもを守るための知恵の使い方を教材文から読み取る中で、それぞれの動物が自身の特徴に合う知恵を用いていることを捉えることができるようにする。さらに、第三次では自分が調べたい動物が子供を守るためにどのような知恵を使うのかを図書資料から読み取り、クイズを作成する活動につなげていくことを目指した。

(2) 単元目標

- ・共通、相違、事柄の順序など情報との関係について理解することができる。

【知識及び技能】

- ・文章の中の重要な語や文を考えて選び出すことができる。

【思考力、判断力、表現力等】

- ・これまでの学習で気付いたことやできるようになったことを生かして見通しをも

ち、積極的に文章の中の重要な語や文を考えて選び出し、好きな動物をクイズで紹介しようとしている。

【学びに向かう力、人間性等】

(3) 実際の授業 (10 時間)

① 第一次 (2 時間)

- ・成島悦雄さんの紹介
- ・題名や扉の文、ライオンの本を読み、成島悦雄さんがどんなことについて書いた文章なのかを予想する。
- ・単元全体のめあて(「成島さんのように動物博士になって、友達に教えてあげよう。」)をつかむ。
- ・「はじめ」「中」「おわり」に区切って文章を読み、大きなめあてをつかむ。

② 第二次 (5 時間)

- ・ライオン・オオアライクイ・コチドリがどんな動物か、どんな知恵を使うのかを読み取る。
- ・今まで読んできたことを振り返り、まとめや題名から成島悦雄さんが伝えようとしていることを考え直す。

③ 第三次 (3 時間)

- ・動物博士になって、どの動物について調べるか決める。
- ・図書資料を読み、自分の選んだ動物の特徴や、どんな知恵を使うのかについて、情報を集め、まとめる。
- ・動物の知恵クイズをする。

(4) 授業を振り返って

第一次では、扉の文や写真で紹介されているライオンを例に動物について知っていることを話し合わせたり、『どうぶつのおかあさん』(小林厚 文・藪内正幸 絵・福音館書)の読み聞かせをしたりすることで、動物はどのように子どもを守っているのか興味をもった状態で、教科書の本文を読み始めることがで

きた。また、著者である成島悦雄さんについての紹介をしたことで、著者に対する関心も高まっていた。

第二次では、動物は子どもを守るためにどんなことに困っていて、それを解決するためにどんな知恵を使っているのかについて読み深めた。その際、動物の親と子どもの挿絵を動かしながら、動物の行動や知恵を確かめた。毎時の授業の要点を黒板横にまとめて掲示したことで、児童がその掲示を見ながらこれまでの学習を想起する姿が見られた。

第三次のはじめには、『動物のちえ③育てるちえ』（成島悦雄監修・偕成社）を途中まで紹介することで、児童は実際の本に触れ、教科書には載っていない子どもを守る知恵に興味をもつことができた。児童に提示した同書は本教材の著者である成島悦雄さんが監修した本であり、「そこで、ちえをしぼります。」などのように、教科書の本文と同様に知恵が書かれていることを示唆する表現があるため、文章中の重要な語を探す時の手掛かりにしている児童が多かった。また、動物には様々な知恵がある中で、この本は子どもを守るために使う知恵に絞って記されており、第二次までの学習内容の流れに沿っていて、1年生の思考の流れに沿いやすかったように思われる。今回の実践では、学級担任が本の紹介を行ったが、図書館で司書が本の紹介をした学級もあった。

また、グループで活動することで、動物がどんなことに困っていて、どんな知恵を使うのかを図書資料から読み取る際に困ったときは、近くの児童と相談しながら図書資料に触れることができた。32人中27人が、図書資料からワークシートに重要な語を含んだ文章を書くことができた。残りの5人も、次時に再度グループで相談し合うことで、重要な語



(グループ活動の様子)

を見つけることができた。

本単元の学習が終わった後には、司書から様々な動物の知恵についての本を多数紹介して

もらった。すると、興味をもった児童がそれらの本を進んで手に取る姿が見られた。



(司書が本を紹介する様子)



(児童が紹介された本を手に取る様子)

(5) 司書の視点から

第三次の「自分の選んだ動物を調べる活動」で児童が使う資料について1年担任と検討していく中で、1年生でも分かりやすい文章の書籍を探すことが難しかった。低学年の資料活用については、リライトも含めた資料提供の工夫を考えていく必要があると感じた。

様々な単元に取り組む中で、関係資料を図書の時間で適宜紹介することによって、児童の学習への意欲が高まっていく様子が見られた。担任と連携し、図書の時間の活用をしていきたい。

3 おわりに

今回の実践を通して、第三次を意識してどのように中心教材を読み進めていくかを考えていくことの大切さを感じた。どのタイミングでどのような資料を児童に提供するか、司書と連携して授業づくりをすることで、学級担任だけでは考えることのできない児童の学習への深まりを感じた。今後も、司書と連携して図書館を活用した授業づくりに取り組んでいきたい。

児童の思いや願いをかなえる学校図書館

玉野市立後閑小学校 教諭

郁田 真三

1 はじめに

(1) 本校の紹介

本校は、玉野市の東部に位置し、山と海に囲まれた自然豊かな環境にある。複式学級3クラス、特別支援学級1クラスの計15名の小規模校である。保護者・地域の皆様も学校に協力的で、児童をあたたく見守って下さっている。

(2) 主題の設定について

GIGA スクール構想が進み、デジタル化の波が教育活動の様々な場面に及び、児童は多くの情報に触れている。そのような中であっても、学校図書館が学校教育において欠くことのできない大切な学びの場であることは変わらない。

「学習指導要領 総則編」において、学校図書館を「計画的に利用しその機能の活用を図り、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に生かす」ことが示されている。このことを受け、児童にとって主体的・対話的で深い学びを支える、充実した学校図書館の在り方を探ろうと、本主題を設定した。なお、本実践をまとめるにあたっては、玉野市内の14小学校から提供された取り組みを参考にしながら行った。

2 具体的な取組

(1) 「読書センター」としての機能

本校は、読書への関心が高い児童が多く、図書の時間を楽しみにしている様子が見られる。読書の幅を広げたり、読んだ本を友達との話題に出したりするなど、読書に前向きである。そのような、児童の読書に対する意欲を育む取り組みを具体的に述べる。

① 学校司書による、本の紹介

図書の時間の始めに、新刊の図書について実物を見せながら簡単に紹介したり、話題のシリーズ本を面陳列でレイアウトしたりし

て、児童の本との出会いを設定している。また、図書館入り口の見えやすいところに、季節や学校行事に関する本を並べ、児童が手に取りやすい環境づくりを心掛けている。さらに、学年に応じた必読図書を見えやすいところにレイアウトして、適宜紹介している。このような読書活動や読書指導の日頃からの積み重ねによって、学校図書館が、児童の豊かな心や人間性、教養、創造力等を育む自由な読書活動や読書指導の場として機能することになる。



② 読み聞かせ

月1回、朝の学習の時間に読書ボランティアの方による読み聞かせを全クラスで行っている。校長・教頭・事務職員など、担任以外による読み聞かせも行った。

また、校内読書週間には、縦割り班に分かれて、高学年の児童が低学年の児童に読み聞かせを行っている。児童は、異学年の友達とコミュニケーションをとりながら、充実した読書の時間を楽しんでいる。

さらに、読書ボランティアの読み聞かせでは、物語の中で繰り返される言葉をボランティアと同じように口に出してみたり、読み終えた後の感想を進んで交流したりなどの様子がよく見られ、児童は読み聞かせの日をとても楽しみにしている。読み聞かせしてもらった本と関連する本を、自分でも図書室で借りる児童も多い。このように、地域の方々との温かい触れ合いの中、本の楽しさを味わうことができている。

このような取り組みを続け、児童の豊かな心や人間性、教養、創造力等を育むことが、児童の自主的、自発的な学習活動や読書活動につながる。



(2) 「学習センター」・「情報センター」としての機能

① パスファインダーの作成・活用

市内の大崎小学校では、総合的な学習の時間に、それぞれの学年のテーマに応じて調べ学習を行う際、複数の図書資料や関連資料、探し方などを一覧にした手引き「パスファインダー」を作成した。

4年生が、総合的な学習の時間に「水について考えよう」というテーマで学習を行った。単元の初めのうちは、自分が求めている情報にたどり着くことができずに困っている児童が多かった。そこで、学校司書の作成したパスファインダーを児童に見せたところ、それぞれの児童が必要な情報にたどり着きやすくなり、円滑に調べ学習を行うことができた。

作成したパスファインダーを次年度以降も閲覧可能としたり、近隣の学校で作成したものを交流し合ったりなど、今後も効果的に活用していくことで、多くの児童の自主的・自発的な学習活動を支援し、情報の収集・選択・活用能力を育成することに努めたい。

※ パスファインダーの一部

児島湖を調べる(歴史・生物・地理)

<本>【図書室にあり】(郷土資料 09)

- ・ **育てよう！美しい児島湖 (2021 発行)**
…児島湖のこと、よごれの原因、よごれの対策、児島湖の生き物 など。
- ・ **児島湖ハンドブック (2022 発行)**
…児島湖のこと、児島湖の地形、どこの川から水が流れてきているか、水質、よごれの原因、全国で何番目に汚いか など。
- ・ **児島湖グリーンガイド (2012 発行)**
…児島湖の生き物(植物、魚、鳥)
- ・ **児島湖なぜなに大辞典 (平成 15 年図書館入)**
…どんな湖なの？なぜ作ったの？なぜきたなくなつたの？など、みんなが疑問に思うことがのっている。データは古いので、児島湖ハンドブックを参考に。
- ・ **郷土につくした人々 ふるさと歴史新聞「児島湖かんたくと藤田伝三郎」**
…なぜ児島湖を作ったのか、歴史を知りたい人はこの新聞がおすすめ。
- ・ **岡山・玉野の 100 年 (2001 発行)**
…27 p に児島湖の昔の写真がある。
- ・ **百科事典 ポプラディア 6 (2021 発行)**
…児島湖のついでの説明がのっている。

② 学校司書と担任との連携

どの時期に、どの学年が、どんな図書資料を必要としているのかを教育課程にも明記し、学校司書があらかじめ本や資料を準備するようにしている。図書館が各教科の様々な授業で活用されることにより、児童の学習がより主体的なものになったり、内容をより豊かにしてその理解を深めたりすることができる。

3 おわりに

学校図書館を、「読書センター」「学習センター」「情報センター」の3つの機能を有する場所として計画的に利活用し、児童の自主的・自発的な学習活動や読書活動を充実するよう努めることが、今後も求められる。特に、司書教諭及び学校司書については、学校図書館がその機能を十分に発揮できるよう、各者がそれぞれの立場で求められている役割を果たした上で、互いに連携・協力し、組織的に取り組むよう努めることが大切である。

読書活動推進に向けて ～連携の取組から～

笠岡市立笠岡西中学校 教諭 笠原 由利子

1 はじめに

(1) 本校の紹介

本校は岡山県の南西部にある笠岡市の中心部にある。瀬戸内海に面し、南には広大な笠岡湾干拓地と大小三十余りの島々からなる笠岡諸島が広がる。交通の便が良く、広島県福山市と接しており、昔から文化的・経済的に深い結び付きを持つ。

かつては中規模校であった本校も急激な少子化により各学年2クラス、特別支援学級2クラスの計8クラスからなる全校生徒203名の小規模校である。

(2) 生徒の読書傾向と図書館利用について

今年度の全国学力・学習状況調査より「普段1日あたりどのくらいの時間、読書をしますか」という質問に対して10分以下の生徒が46.5%、新聞をほとんど読まない生徒94.9%、「家に本がある」という質問で25冊以下が48.3%という結果がでた。

また、家庭で全く本を読まない生徒が年々増えている中で読書量がある生徒達も本の内容は偏りがあり、アニメ化作品のノベライズやライトノベルを読んでいる生徒が全体の半数以上という実態がわかった。

ただ、「読書は好きですか」という質問に対して好きと答えた生徒が約71%いることから、読書をする環境が整っていないことが推察された。

そこで、図書館を利用・工夫することで生徒達の読書環境を整えていく実践に取り組むこととした。

2 具体的な取組

(1) 県・市との連携

① 「おもしろe読書事典」の活用

本校では、毎朝8分間の朝読書を行って

いる。本は各自で用意するが、図書室から毎月10冊の本を図書委員が選択し、学級文庫として教室に置いてある。忘れた生徒はそれを活用する。令和4年度から、3年生にタブレット端末より「おもしろe読書事典」の本を許可したところ、当初は2割程度の生徒が利用していた。自分の好きな本を直ぐに手に入れることができる、面白くないと思えば別の本を直ぐに準備できるというメリットがある。後半になると半分以上の生徒が利用するようになった。

② 「もっとおもしろ読書事典」図書活用

読書週間の企画として、貸借した図書セットの貸出しを実施した。本を2冊一組セットにし、見えないように包装、本の福袋と題して、外側に簡単なテーマ(内容)を記入した付箋を張り付けて貸出す。ただし、これにはルールが設定してある。

- ・家に帰ってから袋を開ける。
- ・興味がわかなくても読んでみる。
- ・返却期限を必ず守る。

福袋の中には当たりくじ(5冊貸出券)や一口感想メモを入れておき、図書委員の手作りのしおりやお守りなども景品にした。どんな本が入っているかわからないので、躊躇する生徒もいたが、当たりくじや司書の勧めに惹かれて早い段階で貸出が完了した。一口感想メモには、「今までに読んだことがない本を読んだ。意外と面白かったので、また読みたい」「興味のない本だったので、最後まで読まなかった」というもの等があった。

③ ブックカバー講習会

笠岡市立図書館の司書を招いての講習会を企画した。夏休みの1日、生徒だけでなく保護者にも参加していただく。内容は、

- ・笠岡市立図書館の上手な使い方
- ・中学生にお勧めの本の紹介
- ・本のカバーかけ講習

の3本立てで、メインは各自が持参した本に、実際にカバーをかけることだったが、コロナ感染症のために未実施となった。

④ 調べ学習用図書への貸借

学校で必要な資料を、すぐに笠岡市立図書館から借りることができる。学校用の貸出カードから学校図書館司書が手配し、1か月間中学校内で閲覧できるシステムになっている。

(2) 地域との連携

- ・ボランティアによる読み聞かせ

各クラス月に1回、卒業生の保護者や地域のボランティアの方々による絵本の読み聞かせ活動を行っている。教材提示装置を使い、モニターに絵本を映し出しながら朗読をしてくださる。機器の設置などの準備と司会進行は図書委員が行っている。

(3) 小学校との連携

① 図書委員による読み聞かせ

人権週間の期間に、中学校の図書委員がオンラインによる読み聞かせを行った。本校の学校図書館司書が低・中・高学年用に3冊の絵本を選定し、それを図書委員が朗読した。放課後に練習を重ね、学区の3小学校に届けて、人権週間の取組の一つに組み込んでもらった。小学生からは感想やお礼のメッセージが届けられ、図書室や廊下に掲示した。

② 読書ビンゴ

「にこにこビンゴ」と名づけ、笠岡西学園（笠岡西中・笠岡小・今井小・大井小）の学校図書館で一年間を通して行った。ビンゴのマス目の中に「教科書に掲載されている本」「卒業生のおすすめ本」などの指定枠や「フリー」の枠があり、ビンゴすることで貸し出し冊数が増えていくというシステムになっている。図書委員がビンゴカードのクラスカラーを選んだり、ビンゴコーナーに本の設置をしたりして、準備を進めた。6割程度の生徒が参加した。

(4) 国語科との連携

① ICT機器を活用した読書記録

令和4年度より本格始動となったAIドリ

ルの意見共有ソフトを使い、読書の記録をつけさせた。一枚目に本のタイトルと作者、二枚目に本の写真、三枚目に本の感想を書かせる。AIドリルを使うことで、興味を持った本を画像で確認することができ、夏休み明けに、読書記録をクラス内で交流する活動を行った。意見共有ソフトを使ってクラスで公開し、メッセージを送る機能を利用して交流した。他の生徒が本どんなを読んだのかを確認するとともに、自分の読んだ本を友人に勧める活動につなげることができた。

② 給食時間の全校放送

コロナ感染症予防の観点から、給食時は前を向いての黙食が基本である。この時間の毎週火曜・木曜の二日間を「朗読の時間」と名づけて、詩や小説、随筆などを紹介する全校放送を行った。国語科教員が、5分程度の朗読をするというもので、長い話は小分けにして実施した。

3 おわりに

岡山県の「おもしろe読書事典」を活用するに当たっては、図書館の本の貸出率が低下するのではという危惧があった。しかし、生徒からは、紙の本が読みやすいという声も多く、杞憂に終わった。「もっとおもしろ読書事典」図書セットの活用では、普段手に取らない本、読まなかったジャンルの本に触れることができ、新たな読書活動に発展した生徒がいたことは大きな成果だと言える。

ビンゴリストにある、卒業生が選書した本は、先輩から後輩への贈り物である。準備中リスト本をブックトラックに置いていたら、「この本めっちゃ感動したやつ」「これ、初めて本を読んで泣いた本」等、様々な声を聞くことができた。素敵な読書体験をしている先輩からの贈り物が、後輩に受け継がれていくことに感動を覚えた。

AIドリルによる活動も生徒の読書意識に変化をもたらすことができた。読書について改めて興味を持つ良い機会であったと思う。

単発的でなく継続した取組を行うことが課題である。

津山モデルを活用した学校図書館運営 ～美作支部の取組から～

岡山県立津山工業高等学校 学校司書 竹内 英里香

1 はじめに

美作支部は、岡山県北の津山市・美作市・勝田郡の地域からなり、司書配置のある高校は現在9校となっている。中でも津山市内の5校は津山市立図書館と「津山モデル」という相互協力協定を締結している。ここでは、その津山モデルを活用した学校図書館運営における取組を報告する。

「津山モデル」とは、津山市独自の図書館相互協力制度システムの通称である。設置主体の異なる図書館が協定に基づいた連携を行うことで、津山市全体の読書・学習環境の拡充と、利用者の利便性の向上を目的としている。

この連携は2007年5月に「津山市立図書館と美作大学附属図書館との相互協力に関する協定」として始まり、翌年4月に津山工業高等専門学校が、10月に市内6高校（現在5校）が協定に加わった。

津山市立図書館が毎日搬送便を運行しており、協定参加館はお互いの図書館を地区館のように利用することができる。

2 具体的な取組

(1) 授業支援

協定に参加している津山市内の高校では、図書館を運営する上で日常的に津山モデルのシステムを活用している。ここでは、授業支援に関する事例を紹介する。

① 情報デザイン（津山工業高等学校）

1例目は、津山工業高校のデザイン科2年生の例を紹介する。課題として統計グラフを作成するにあたり、テーマ調べのために図書館を利用したいと依頼を受けた。事前授業で生徒が挙げたテーマ候補を聞き取り、それぞれの内容ごとに参考になりそうな本を市立図書館から相互貸借した。

相互貸借にあたっては、美作大学が管理する、美作地区の横断検索システムを利用する。市立図書館からの相互貸借は、通常利用者と同じく、Web上で検索・予約を行うことができ、在庫資料に関しては当日中の配送も可能となっている。また返却の際も、協定参加館のメーリングリストで返却本の回収を依頼すると、市立図書館の搬送便に立ち寄ってもらえる。返却の際に煩雑な手続きを必要としないところも、事務室との兼務が多い美作地区の学校司書にとってはありがたい点である。

② 絵本製作実習（津山工業高等学校）

続けて、同じく津山工業高校デザイン科の例を紹介する。3年生徒が課題として絵本を作成するにあたり、絵本の特徴等を解説してほしいという依頼を受けた。

1例目同様、美作地区の横断検索システムを利用して本を検索し、津山市立図書館より資料の相互貸借を行った。大型絵本なども直接学校に届けてもらえるため、生徒の前で実際に読み聞かせの実演も行った。



また作成の参考に、絵本作品も数多く取り寄せた。高校図書館は絵本の所蔵数が少なく、自館だけで参考となる資料を揃えることは難しいが、津山モデルを活用することでより充実した授業支援を行うことができたといえる。

③ 国語表現（津山工業高等学校）

④ 国語（津山中等学校）

3例目と4例目は、同一テーマの類書を

まとめて相互貸借することにより授業支援を行った例を紹介する。まず津山工業高校では、生徒が一人一篇好きな詩を選んで鑑賞文を書く、という授業を行うにあたり、詩集の取り寄せの依頼を受けた。

取り寄せた詩集はブックトラックに設置し、生徒が自由に閲覧できるようにした。お気に入りの詩を選ぶ、という授業の性格上、人数分+ α の冊数を選定する必要があったが、フリーワード検索で分類番号を指定することが可能な美作地区横断検索機能を活用することで、効率よく選定することができた。



津山中学校では、論語に関する調べ学習を行うにあたり、60冊ほどの資料を市立図書館より取り寄せた。また学校図書館に所蔵があるものに関しても、複本として同じ本を依頼するなど、生徒がより多くの選択肢の中から選定できるよう工夫した。

いずれの授業も、担当教員から依頼を受けてから授業日までが間もなかったため、県立図書館の学校図書館授業支援のひとつである学校セット等で対応しようとすると、準備が間に合わなかった可能性が高い。即応性の高さが特徴の津山モデルを活用することで、急な依頼でも柔軟に対応することが可能となった。

(2) 図書委員会交流会

美作地区の司書部会では、毎年図書委員会交流会を開催している。内容は年によってさまざまだが、近年は津山モデルにより確立された市立図書館・高校図書館間の結びつきを盛り込んだ内容となっている。

令和3年度には、津山市立図書館を会場とし、図書委員生徒が来館者対象に豆本やブックカバー作成のワークショップ等を行った。令和4年度は、津山工業高校図書館を会場とし、POPの作成を行った。交流会前の準備段階として、まず司書が津山市立図書館職員よりPOP作成の講義を受けた。交流会当日には、

その内容をもとに津山高校司書がワークシートを作成し、生徒にレクチャーを行った。



交流会の参加者からは、「POPの作り方を学べてよかった。楽しかった(生徒)」「POP作りは日頃の図書委員会活動に直結する実践的な内容でとても役立った(教員)」といった感想が寄せられた。日頃からPOP作成の業務を行っている市立図書館職員からレクチャーを受けられたことで、生徒たちにもより実践的な指導を行うことができた。



交流会当日に生徒が作成したPOPは、秋の読書週間に合わせて市立図書館で展示した。

3 おわりに

学校図書館にとって、授業支援を行う意義は大きい。実際に教員がどのような資料を必要としているのか、どのような資料が生徒にとって使いやすいのか、またそうでないのか、直接知ることのできる機会は貴重である。津山モデルの大きな特徴として、「搬送便が毎日運行している」という点がある。日々業務に追われる教員から「明日までに」「今週中に」といった急な依頼を受けて、せめて1週間準備期間があれば、と思った経験のある学校司書は多いのではないだろうか。タイミング次第では即日対応も可能な津山モデルのスピード感は、授業支援の機会を損なわないためにも大変有意義に機能している。

図書館5原則に“図書館は進化する有機体である”という一節がある。自校の授業カリキュラムにおける図書資料の需要を把握することは、直接図書館の改善につながる。学校図書館を“進化する有機体”としてブラッシュアップさせていくためにも、今後も津山モデルを活用した取組を続けていきたい。

子どもを本に近づける手立ての工夫

真庭市立北房小学校 教諭 安田 京幸

1 はじめに

本校は、旧北房町内の小学校が一つに統合され開校6年目を迎える小学校で、現在児童数は214人である。木材を使ったきれいな校舎内の1階中央部分に、メディアセンターという名の図書コーナーが設置されている。教室のように仕切られておらず、誰でも自由に入り利用しやすく、学校中央部分の2階建て校舎の吹き抜けとなった開放感のある空間の中に8,487冊の本が整理され並んでいる。そのため、児童のメディアセンター利用率は高い。図書司書は、中学校との兼務のため、週に3日、本校の図書館経営に携わっている。

しかし、私は本校に赴任して3年目を迎えるが、担任する児童の実態として、自分から進んで読書をしようとする児童が年々少なくなっているように感じている。そこで、児童が本を身近に感じ、自分から本に近づく児童の育成を目指して、微力ながら取り組んでいる。

2 具体的な取組

(1) 学級内での取組

まず、本に近づけるために学級の中で行った手立てを紹介する。

① 環境づくり

ア 学級文庫

子どもを本に近づけるためには、メディアセンターのみではなく、教室の中でも常に本を身近に感じ、気軽に手に取ることが大切だと考え、教室内の棚には、常時、我が子が子どもの時に読んでいた本などを置き、隙間時間に児童が本を手に取りやすいようにした。低学年の場合は絵本を中心に置き、高学年では学年相当の本や学習に関連した本、さらに低学年向けの本や絵本を置くこととした。これには、一定の効果があり、低学年の児童は

メディアセンターに足を運ばなくても、隙間時間には本を手にするようになり、高学年の読書があまり好きではない児童にも、気楽に本を手取るきっかけ作りになった。



←絵本を中心とした1年生教室

イ 学校図書館・公立図書館を利用して学習に関係した本も手に取る機会を作りたいと考え、図書司書を通じて公立図書館よりクラスの児童が1人1冊は手に取ることができる冊数を借りた。ロッカーの上や棚の上に、ブックスタンドを用いて紹介し、手取りやすい環境を作った。

例) 1年 乗り物の本・動物の本など

6年 修学旅行で行く山陰に関する本・宮沢賢治の本など

これは、すぐにインターネット等で調べようとする子どもが多い中、一部の児童に効果があった。

② 読書紹介の取組

週末の宿題として読書を出し、週明けにクラスのみんに紹介する取組を紹介する。

ア 低学年での取組

1年生の場合、文章に書いて読書紹介する活動は難しいため、月曜日の国語科の時間に、毎回、週末に借りた本を持ち、好きなページを開いてどこが良かったのかを紹介する活動を取り入れた。低学年の場合、実際のページを見せて伝えると、「読んでみたい。」と感じる児童が多く、次にメディアセンターへ借りに行くときには、絵を手掛かりに友だちが紹介した本を借りようとする児童が大勢いた。

イ 高学年での取組

高学年になると、文章に書いての紹介ができるようになり、週末の宿題で読書をして紹介文を書く取組をした。しかし、書くことが苦手な児童もいることから、後半はタブレットを用いて、本の画像や主人公の絵を入れつつ作成するように工夫した。このことにより、徐々に紹介のポイントやレイアウトを考えた紹介文が書けるようになり、国語科や調べ学習のまとめ方にも効果があった。また、図書委員会の児童が、図書司書に教えてもらった「簡単POP作成くん」を使ってのPOP作りを紹介することで、自力では紹介文を作成しにくい児童も作成でき、クラス全員で取り組むことができた。

低学年・高学年共に、紹介で作った文は、クリアファイルにはさみ、本のようにして教室に掲示することで、子どもたちの意欲付けに効果があった。

(2) 司書と連携した取組

① 空想科学教室

昨年、図書司書が「STEAM 空想科学教室」に申し込み、空想科学読本の著者である柳田理科雄氏を招いて、空想科学教室を行う機会を持つことができた。2学年授業をしていた中で、子ども達は空想科学に興味を持つと共に「空想科学読本」の本にも興味を示すようになった。メディアセンターにある「空想科学読本」には、一部熱心な愛読者がいたが、教室に置いていた17冊の「空想科学読本」の本に対しては、手に取ることがほぼなかったが、興味を持って手に取るようになった。自分が本を書いた人に実際に会って学んだことと、本の内容に興味を持ったことが合わさってのきっかけを作ることで、今まで興味を持たなかったジャンルの本にも関心を持ち、自然と手に取ることができるようになることを実感した。

② レオ・レオニのうさぎを作ろう

レオ・レオニの絵本に出てくるようなうさぎ作りを、いろいろな用紙を使って作る活動を行った。これは、低学年中心の活動となったが、作成することを楽しみレオ・レオニの本にも興味を持つきっかけとなった。

③ 給食とのコラボ

図書司書が朝読書の時間等を活用して対決物の絵本の紹介をした後、それぞれの食べ物に関する投票を行い、一番人気の物が給食にでるという取組を2年間行った。一昨年は「にく」昨年は「麺」についての総選挙を行ったが、図書司書による絵本の読み聞かせを体験した上での活動は、全校の児童が興味・関心を持つことができた一大イベントとなった。

(3) 学校での取組

① 地域ボランティアの方との取組

昨年度まで、毎週金曜日の朝学習の時間に、低・中・高学年のどこかの学年に、地域のボランティアの方による読み聞かせを実施してきた。コロナ禍で来ていただけない時は、学校の職員の中でくじを引き、当たった学年へ行行って読み聞かせを行った。低学年は、読み聞かせが大好きで楽しんで参加できていた。一方高学年は、アンケート結果から、読み聞かせを楽しむよりは、自分の選んだ本を自分のペースで読みたい児童が高学年全体の8割を超えていた。そこで本年度は、地域ボランティアの方には低学年を、高学年には回数を減らして職員が読み聞かせを実施している。

② 週末読書の取組

本校の教育課程の保護者アンケートでは、毎年、読書に対する項目の値が低くなっている。そこで、家庭を巻き込んだ読書時間が増えるように、週末には全校読書の宿題を行うようにしている。習慣化しつつあるが、未だ本は借りるが読まない児童がいるため、今後の課題となっている。

3 おわりに

昨今のネット環境の普及等で読書の必要性を感じない児童にとっては、ただ読書を勧めるだけでは、子どもを本に近づける効果がないように感じる。読書に目的を持たせることで、読書の習慣化につながり、好きな本が一冊でも見つかるよう、今後も取組を続けていきたい。

読書の輪を広げるために ～図書委員会・国語科の取組～

岡山市立御南中学校 教諭 太田理恵子
教諭 三宅 実咲
学校司書 春田 辰美

1 はじめに

本校は、岡山市の中心部から南西に約 5.5 km の笹ヶ瀬川の東岸に位置している。全校生徒は 834 名、1 年生 9 学級、2 年生 7 学級、3 年生 8 学級、特別支援学級 5 学級の大規模校である。

令和 4 年度、図書館教育に関して、課題に挙げたのは以下の二点である。

- ・本校の図書館は各学年の教室から離れた場所に位置しており、貸出等の利用がしにくい環境にある。
- ・メディア時間の増加により、読書時間が減少している。

上記二点の改善に向け、図書委員会・1 年国語科・2 年国語科で取り組んだ内容を紹介する。

2 具体的な取組

(1) 図書委員会の取組

① 朝読書の推進

本校では、毎日 8 時 25 分～8 時 35 分の 10 分間、朝読書の時間を設けている。図書委員は、読書の始めと終わりの号令をかける。

それだけでなく、読書に取り組むことのできていない生徒がいないか教室を回って確認し、声掛けを行っていたクラスでは、自然と朝読書を行う静かな雰囲気を作ることができるようになっていった。このことを委員会内で共有し、学校全体が朝読書に前向きに取り組めるように図書委員が働きかけるようにした。

② おすすめの本の紹介

1 学期には先生のおすすめの本、2 学期には図書委員のおすすめの本に関するポスターを作成し、図書館前に掲示した。

先生のおすすめの本に関しては、各学年団の先生にインタビューを行ったため、どの学年の生徒も興味を持っていた。

図書委員のおすすめの本に関しては、図書委員自身も自分の読書生活を振り返る良い機会となっていた。



③ 読書週間の設定

7 月・10 月・12 月にそれぞれ 10 日ほど読書週間の期間を設定した。貸出冊数を通常の 3 冊から 5 冊に増やしたり、生徒からイラストを募集したしおりや雑誌の付録をプレゼントする企画を行ったりすることで、利用者の増加につなげることができた。



④ クラス対抗ジグソーパズルの実施

毎日図書館で本を借りた生徒の人数に応じた枚数のパズルのピースを貼り、パズル完成までの期間を競う企画を行った。クラスで表彰を目指し図書委員が呼びかけを行うことで、普段図書館に通うことのない生徒が図書館に足を運ぶきっかけになっていた。



⑤ 健康と食に関する本のコーナー設置

12 月に保健委員会が健康と食をテーマにした全校集会を行ったことに合わせ、「野菜」「ウイルス」「ヘルシーレシピ」「生活習慣」

に関する本を図書委員が選び、展示を行った。該当の本に興味を持ち、借りる生徒が多く見られた。



(2) 1年国語科の取組 (ビブリオバトル)

夏休み前の読書指導として、国語の授業内で「ビブリオバトル」を1年担当学級で行った。まず、実際のビブリオバトルの様子を映像で確認してから、自らが読んで印象に残った本を持ち寄り3分間で発表をした。その後、ディスカッションの時間を2分設け、質疑応答や読んでみたい本の選出にあたった。

実際に本を持ち、興味関心を引きつけながら、内容を紹介し、生徒たちにとって読書活動へのよい動機付けになったと感じている。

図書館司書と連携を取り、チャンプ本(一番読みたいと思われた本)を図書館に導入してもらうなどの手立ても有効である。

国語科教員を中心に、読書指導を推進することができた。生徒の事後アンケートで「ビブリオバトルをまたやってみたい」と回答した者がほとんどであった。今後も継続して行ったり、ブックトークを行ったりすることで、本への更なる興味喚起につながると考えられる。

(3) 2年国語科の取組 (本のポップ作り)

① 授業計画

第1時	ワークシートを用いて、ポップの構成を考える。
第2時 第3時	ポップ作りを行う。

ポップの構成としては、選んだ本のタイトル・著者名・出版社と本のあらすじや内容、本を手にとってもらうためのキャッチコピーを必ず盛り込むように指導した。本の出版社は奥付で確認するようにし、本の内容を引用する際に、出典を明らかにすることの重要性も併せて指導した。キャッチコピーを考える際には、印象に残っていることばや登場人物の台詞を引用することも有効であることを助

言した。用紙はA5サイズの白色の画用紙を用い、イラストを入れたり、画用紙を貼り合わせて立体的にしたりと、興味を持ち、本を手にとってもらうための工夫をすることができている生徒が多く見られた。

② 図書館との連携

生徒が作成したポップの中で、図書館の蔵書にあるものを図書館に展示した。他学年の生徒も積極的に手に取り、本の貸出につながっていた。

3 おわりに

(1) 各取組の振り返り

図書委員会としては、1年間の取組を通して、委員の生徒が図書館の円滑な運営のために自主的に動くことができるようになった。本の紹介やコーナー企画など、委員の生徒が情報を発信する活動は特に意欲的に取り組むことができていた。

1・2年生の国語科としては、読書の輪を広げるために、一つの単元の授業を行うことができたが、教科書に載っている教材の学習を深めるための図書館の活用を行うことができていないのが課題である。

(2) 令和4年度の成果と課題

一人当たり 貸出冊数	本校	市内平均
令和2年度	18.4冊	16.7冊
令和3年度	19.6冊	15.2冊
令和4年度	20.6冊	16.4冊

貸出冊数に関しては、上の表のとおり、過去3年間で増加し続けている。今後も図書委員会の取組を充実させ、全校生徒の図書館利用につなげていきたい。

読書時間の減少への対策としては、毎日の朝読書の取組を大切にしてきた。朝読書の時間が貴重な読書の機会になっている生徒も多いため、読書へ向かうきっかけとして、今後も全校で取り組んでいきたい。

また、Chromebookの導入により、他教科でも調べ学習等で図書館を活用する機会が大きく減少しているので、国語科を中心に、図書館と連携した授業を行っていきたい。

わくわくする学校図書館をめざして ～本に親しむ生徒の育成～

赤磐市立高陽中学校 教諭 遠藤真理枝
学校司書 吉次真由美

(研究同人) 和気町立和気中学校 教諭 片岡 由佳

1 はじめに

(1) 本校の紹介

本校は岡山県赤磐市の南西部に位置している。1, 2年生2クラス, 3年生3クラス, 特別支援学級3クラス, 計10クラスからなる全校生徒約250名の中規模校である。(令和4年度)

本校から近い距離に赤磐市立中央図書館があり, 本に親しむ環境が整っている。

(2) 本校の図書館

本校の図書館は, 蔵書が約12000冊と充実している。令和4年度の貸出冊数が約8200冊で, 一人当たり33冊と利用はかなり多い。一方で, 多くの生徒の利用の内訳が現代小説に偏っている現状がある。

そこで, ①本に親しむ生徒の育成の推進②生徒の読書のジャンルを広げること, 以上2点について重点的に取組を行った。

2 具体的な取組

(1) 学校全体の取組

① 朝読書の実施

本校の朝読書は, 8時30分から8時40分までの10分間である。原則, 毎朝行っており, 教員も一緒に読書を行う。朝読書で読む本を探しに図書館に向かう生徒の姿もしばしば見られる。学校全体で継続して行っている取組であり, 貸出冊数に大きく影響があると考えられる。

② 学校支援ボランティアによる読み聞かせ

年間5回, 朝読書の時間を活用して学校支援ボランティアによる読み聞かせを行った。ボランティアの方に各教室に出向いてもらい, 絵本や本の読み聞かせ, 民話の語りなどをしていただいている。読み聞かせ後, 生徒はすぐに感想を書き, お礼としてボランティアの

方に渡している。

(2) 学習図書委員会の取組

① ピックアップコーナー

ピックアップコーナーとは, 学習図書委員会の生徒による図書室の一角に作られた本の紹介コーナーのことである。毎月, 担当学年を変えて, 図書館にある本の中から一人一冊選び, 書いた紹介文を展示した。先輩や友達が勧めた本に興味をもつ生徒が多く, ピックアップコーナーに置いた本はよく手に取られたり, 貸し出されたりしていた。また, 日頃自分では選ばないようなジャンルの本も置いてあるので, 新たな分野の読書へチャレンジしやすかったようだ。



② 学級文庫

学級文庫は学習図書委員の生徒が管理している。月替えて選書して入れ替え, 各クラスに10冊ずつ置いている。

③ 読書週間

ア 先生方のお勧め本紹介

先生方のお勧め本と本の紹介を書いたカードを模造紙に貼り, 掲示した。その際, 可能な限りそのお勧め本を紹介カードとともに置いた。

イ 赤磐市立中央図書館の職員さんにインタビュー

学校図書館にとどまらず、利用の幅を広げたいとの思いから、赤磐市立中央図書館でインタビューを行った。よく貸し出されている本、最も利用している世代、人を集める工夫、中学生へのメッセージなどを職員の方に聞き、学習図書委員発行の配付物として、全校生徒に配った。手書きで温かみのある紙面になった。

ウ 学級文庫に入れて欲しい本のアンケート
学習図書委員が毎月10冊どのような本を教室に学級文庫として置いて欲しいか、学級でアンケートを行った。自分たちで集計し、それに基づいて選書を行った。

エ カタログコーナー

図書館に新しく入荷してほしい本をカタログの中から選び、リクエストすることができるコーナーを作った。

オ チャレンジザミッション&よみくじ

図書館や本に関するクイズ形式によるビンゴを達成するとごほうびに「よみくじ」が引けるといものである。「よみくじ」とは、あらかじめ図書館司書が分類番号ごとに選書しておき、引いた番号によってランダムに本が渡されるものである。普段なかなか読むことのないジャンルの本に手を伸ばす機会となった。また、ちょっとしたゲーム性もあり、生徒からは好評であった。

(3) 図書館としての取組

① 図書だよりの発行

新着図書の案内、利用の様子、呼びかけなどをまとめて月に1度の頻度で発行している。夏休みには「図書だよりの職員用」も発行している。内容は、利用の様子、課題、運営報告などで、先生方に図書館への興味を持っていただく目的である。

② 本の紹介・読書案内・環境整備

ア 展示・掲示

学校行事や年中行事に合わせた特集を組んだり、話題本や人気本からの関連する本をテーマに月替わりで展示したりした。

イ 日常的な読書案内

カウンターに一冊、作品・作者・ニュース

などの本を置いた。その際、手書きの簡単なコメントを添えた。また、返却期限票の空きスペースにプチ情報と関連本の紹介を掲載した。具体的には、ことわざ、難読漢字、数独(オリジナル)、名言や格言など、飽きないように数種類をこまめに更新した。

ウ 環境整備

生徒が自ら本を見つけられることも読書支援のひとつと捉え、分類別に0類から順に並ぶよう書架を移動した。長年に渡りスペースや棚のサイズに融通が利かず、本来の場所へ置けずにいた。いくら分類表を掲示していても生徒たちに分類の理解を求めるのは難しい状況であった書架を移動したことにより、分かりやすい配架順が実現し、分類法に基づく利用指導が日常的に行いやすくなった。

(4) 授業での取組

1年生の国語の授業において、ビブリオバトルに取り組んだ。1時間目に発表メモを作り、2時間目に班の中で発表した。緊張しつつも、お勧めの本の魅力を伝えようと必死に語る生徒の姿が見られた。以下は生徒の振り返りである。「自分は読まないような本を紹介されたが、発表を聞くうちに読みたくなった。」
「紹介するためにもう一度本を読んだら、別の面白いところを見つけた。」本を通して友達の新たな面を知ったり、友達を通して新しい読書分野を広げたりすることができたようだ。

3 おわりに

日頃から行っている読書指導に加えて、今年度は生徒主体の活動を増やしたことにより、本に親しむ生徒の育成の推進ができたのではないかと考える。特に、ビブリオバトルや本の紹介など、同年代の友人から本を勧められることで本に親しむ生徒の育成が推進されるということ強く実感した。

また、ピックアップコーナーや「よみくじ」などの取組によって、「文学」のみならず他のジャンルに手を伸ばす生徒が増えたと感じている。

今後も、生徒が読書の楽しみを味わい、豊かな心を育むきっかけとなるような学校図書館の在り方を模索し続けたい。

確かな論理的思考力と豊かな情操を育む読書指導 ～中高6学年を通じた帯活動の実践～

ノートルダム清心学園 清心中学校・清心女子高等学校 教諭 太田 菜津子
学校司書 野崎 敦子

1 はじめに

本校はカトリックのミッションスクールであり、「心を清くし 愛の人であれ」を校訓とする県内唯一の女子校である。

本校の教育理念のひとつである「冴えた理性と豊かな情操を兼ね備え、あわせて確固たる人生観、道義に満ちた社会観を持つ人間を育成する」を大きな目的とし、2019年度より確かな論理的思考力と豊かな情操を育むための言語活動を「言葉のちから」という名称で実施している。

全校生徒を対象に、毎朝20分間のモジュール活動を行う中で、「論理」と「情操」という2つの面からの言語能力の育成を目指している。

また、この活動では、言語能力育成のひとつとして読書活動の充実を目的とし、図書館との積極的な連携を図っている。

2 具体的な取り組み

「言葉のちから」は、主に「黙想」「読書」「読解」の3つの活動を柱としている。今回は特に「読書」における取り組みについて紹介したい。

(1) 課題読書について

① 採択の基準

読書の活動においては、生徒が自分の好きな本を読む「自由読書」と、学年ごとに指定された図書を読む「課題読書」の時間をそれぞれ設定した。

課題読書では、学年ごとに課題図書を設定している。基本的には学年始めの4月から1学期間に読む本を各学年1冊設定し、他にもそれぞれの学校行事に関わるような内容の本を設定することがある。課題図書の選定基準は、中学生は「生徒たちが読書を通じて共感を覚えやすいような、身近な年代の少女を主人公とした作品」や「生徒に読書の喜びや楽

しさを伝え、読書の習慣化につながる作品」とした。高校生は「教科書に採択されていて、高校卒業までに通読してほしい作品」や「自身の進路を考えるきっかけになる書籍」とした。

以下、2022年度に採択した課題図書である。

- ・中1…ミヒヤエル・エンデ『モモ』
- ・中2…モンゴメリ『赤毛のアン』
- ・中3…L.M. オールコット『若草物語』
- ・高1…池上彰『なんのために学ぶのか』
- ・高2…キム・ジヘ著（尹 怡景訳）『差別はたいてい悪意のない人がする』
- ・高3…池上彰『なんのために学ぶのか』
ヴィクトール・E・フランクル著
（池田 香代子訳）：『夜と霧』
末永幸歩『13歳からのアート思考』

② 日々の読書記録

特に課題読書の活動において、日々の読書記録を書くようにした。20分間の中で自身が読み進めたページ数と心に残った一節を書き留め、感想を書くという形式にした。読書記録を書くことで本からの学びを振り返ることができるとともに、特に高校3年生にとっては大学入試の面接などで自身の読書体験を語る上で重要な資料となっている。



(2) 図書館との連携

本校図書館は中・高共用で、各クラス2名の図書委員を中心に図書館利用者や貸出冊数

を増やそうと活動している。

「言葉のちから」の時間の設定にともない、次のような取り組みを行っている。

① 利用時間の延長

「言葉のちから」の実施に合わせて開館を早め、登校してすぐに図書館を利用できるようにした。図書委員も朝当番を決め、鍵の開閉やカウンター業務、朝刊の差し替えなどを行った。

② 学級文庫の充実

「言葉のちから」により校内での読書時間が増加したことから、学級文庫を定期的に設置している。クラスにすぐに手に取れる本があるという環境は、生徒たちの充実した読書習慣を促すものになっている。

また、図書委員にとって自分のクラスの学級文庫を選定するという機会は、自身の読書に対する興味・関心の幅を広げることにつながると期待できる。



③ 本の魅力発信

校内の読書活動の推進を目的とし、本の魅力を伝えるイベントを行った。校内放送で本の一部を朗読し、その関連本のテーマ展示を図書館で開催するなど、図書の貸出増加に向けた取り組みにもつながった。「同じ部活動の先輩がおすすめしていたから」という理由でいつもは読まないジャンルの本を選ぶなど、生徒にとって新たな読書体験のきっかけになっていたようだ。



3 おわりに

(1) 成果

「言葉のちから」の実施の主な効果として、まずは読書量の増加が挙げられる。年度末に全校生徒へのアンケートを行い、「言葉のちから」実施前後での一か月の読書量を比較した。実施前、一か月間全く本を読まなかった生徒は43%だったが、「言葉のちから」実施後の同じアンケートでは0冊が6%と大きく減少し、1冊が48%、2～3冊が37%と読書量が大幅に増加していることが分かる。この結果から、「言葉のちから」の実施により、毎朝20分間、確実に読書をする時間を確保することができていると言える。

次に、確かな論理的思考力と豊かな情操の育成に向け、この豊富な読書活動が生徒にどのような効果をもたらしているのかを検討したい。

まず、語彙力や文章理解力の育成があげられる。単純に言葉にふれる機会が増えるだけでなく、より豊かで洗練された言葉に出会うことができる。

また、普段の読書において小説に偏りがちな生徒が多い中、評論やエッセイを課題図書として設定することで、ひとつの話題について論理的に記述された文章を読む時間を設定することができる点が挙げられる。これにより、文学的文章を読むことによって期待される情操面での育成だけでなく、論理的な思考の育成に向けたインプットの機会を得ることができる。つまり、「言葉のちから」が目的とする「情操」と「論理」の両面をバランスよく育むことができると考えられる。

(2) 課題

日々の学校生活の中で、毎日確実に本に触れる時間があるという環境は、生徒にとって大変有意義なものである。そして、その機会をより充実したものにするためには、図書館の活用が不可欠である。授業などで一時的に利用するのではなく、生徒たちが日々の生活で自然に活用できる図書館にするために、今後さらに学校全体での連携と意識の涵養を目指していく必要がある。

主体的な学びを生み出す授業をめざして
～「知りたい」「読みたい」「伝えたい」を引き出すために～

倉敷市立老松小学校 教諭 松本 啓子
学校司書 岡本 佳也子

1 はじめに

本校は、倉敷駅南西徒歩15分に位置し、倉敷市街地の中心部近くにあり、学級数34学級、児童数888人（令和5年5月1日現在）の学校である。すべての学年において、年間図書貸出冊数が市の平均を上回っていて、朝読書の時間（毎週金曜朝学習15分間）や図書の時間には、黙々と読書を楽しむ姿が見られている。校内読書週間には、様々な活動に意欲的に参加する児童が多い。よい環境の下、学校図書館を最大限活用し、教室での授業と図書館での学習を日常的に結び付けていきたいと考え、2学年において「読むこと」に関する授業を提案することとした。

2 具体的な取組

(1) 4年生の授業の実際（全12時）

中心教材「ごんぎつね（光村図書4年下）」
第3次 12時 目標「新美南吉の他の作品を読み比べ、自分なりの考えをまとめることができる。」

① 課題を自分事としてとらえさせるために（導入）

- ・新美南吉の紹介を作品とともにすることにより、作品に関心をもちやすくとともに、本時のめあてにつなげることができるようにする。
- ・「手ぶくろを買いに」を読み聞かせし、ブックトークの方法を知らせることで、本時の活動が具体的に理解できるようにする。

② 考えを広げ、深めさせるために（展開）

- ・クラウド型授業支援アプリを利用することで、教師の準備した作品の中から興味のある本を自分で選択して、自分のペースで読むことができるようにする。
- ・ブックトークでは、「気持ちの変化」「情

景」「感想」の3つの観点で自分の考えをまとめることで、友達との共通点や違いに気づきやすくする。

- ・ペアや近くの友達、同じ作品を選択した友達とブックトークをして感想を伝え合うことで、自分の考えを友達に伝えたり、友達の意見から考えを広げたりすることができるようにする。

③ 課題解決の過程を振り返らせるために（終末）

- ・ブックトークで感想を伝え合い、友達との感じ方や考え方の違いがあったことを確認することで、物語に対する考えを深めることができたことを認識できるようにする。

(2) 2年生の授業の実際（全13時）

中心教材「お手紙（光村図書2年下）」
第3次 13時 目標「『ふたりは…』シリーズの作品を楽しんで読み、感じたことや分かったことを友達と共有することができる。」

① 課題を自分事としてとらえさせるために（導入）

- ・「お手紙」は「ふたりはともだち」の中の1つのお話であり、がまくんとかえるくんのお話が他にもあることを伝えることで、読むことへの関心をもつことができるようにする。

- ・「なくしたボタン」を読み聞かせした後に、「お手紙」の挿絵でかえるくんの上着にボタンがたくさんついていることに気付かせることで、この2冊の共通点を確認する。さらに、他にも共通点があるのかと問うことで、本時のめあてにつなげることができるようにする。

② 考えを広げ、深めさせるために（展開）

- ・クラウド型授業支援アプリを利用するこ

とで、教師の準備した18作品の中から興味のある本を自分で選択して、自分のペースで読むことができるようにする。

- ・読んで気付いたことや感想を「しょうがいカード」に書き、ペアや近くの友達、同じ作品を選択した友達と、カードを読み合ったり感想を伝え合ったりすることで、自分の考えを友達に伝えたり、友達の意見から考えを広げたりすることができるようにする。

③ 課題解決の過程を振り返らせるために（終末）

- ・シリーズ本を読み、読後の思いを簡単に振り返られるワークシートを用意することで、更なる読書意欲をもつことができるようにする。

(3) 授業を終えて

2学年において「読むこと」に関する授業を提案した。4年生では、「新美南吉記念館」のサイトで物語の情景理解をしやすくしたり、新美南吉が短命の中で多くの作品を残している生い立ちを紹介したりすることで、「ごんぎつね」の作品をもっと深く、また、新美南吉の作品をもっと多く「知りたい」という思いをもつことができたと考える。家庭学習で取り組んでいる音読頑張りカードには、ほとんどの児童が目安としている3行以上の感想や考えたことを書き、それが次時の学習の導入につながることもあった。2年生では、「なくしたボタン」の読み聞かせ後、既習の「お手紙」の挿絵と比較することで、挿絵から児童が新たな発見をし、他の作品はどうなっているのか気にしている様子が見られた。

また、クラウド型授業支援アプリを活用することで、用意したアーノルド＝ローベルのシリーズ本や新美南吉の作品をいつでもどこでも読みたいときに読みたい本が選べるように工夫を行い、児童の「読みたい」という思いをすぐに実現できるようにした。図書の間や朝読書の時間、休み時間にも意欲をもって継続して読書をすることができていた。どちらの学年でも行った読み聞かせでは、どの児童も興味をもって真剣に聞いている姿が見られ、本との出会いの工夫も大切だと感じた。

友達に紹介したい内容や気に入った表現、読み取った心情の変化などに線を引ながら読むことができるタブレットというメリットを取り入れながら読み進める児童の姿が多く見られ、それにより、より一層「伝えたい」という思いを引き出すこともできたと考える。

さらに、2年生には同主人公のシリーズ本を一覧にし、読み進めることができるワークシートを活用したことで、さらなる読書意欲をもつことが可能となった。授業から1か月後に行われた校内読書週間の取組の一つであった「おすすめの本カード」には、「伝えたい」という思いをもち、多くの児童が参加していた。また、掲示されたカードを熱心に読み、貸出予約をしたり、学校司書に本の在りかを尋ねたりする姿も見られた。友達の「伝えたい」という思いを受け取り、自分の読書活動に生かそうとしている姿も見ることができた。児童の発達段階に合わせた本への出合わせ方や読書意欲の継続の仕方は、今後も工夫していきたいと感じた。



3 おわりに

今回の実践を通して、該当学年の児童に合った本をいかに授業の中で取り入れるかを工夫することが大切であると感じた。「読むこと」に関する授業づくりの体制を整えることへの必要性を感じたので、学校司書と協力し、国語科だけでなく他教科の年間指導計画に合わせて学校図書館活用指導計画を作成した。また、国語科教科書で紹介されている本（「この本、読もう」「本のせかいを広げよう」）を図書館カウンター前に並べ、すぐに手に取ることができるように整備した。図書の時間に紹介される機会も増え、児童の読書意欲へのつながりも感じた。

今後も児童が目を輝かせながら本に向かう姿を目指して、学校図書館を学習に効果的に活用できるように、学校司書と連携を深めていきたい。

図書委員会と連携した読書推進活動

鏡野町立鏡野中学校 教諭 山崎 亜紀子
学校司書 妹脊 多郁子

1 はじめに

本校は岡山県北部に位置し、5小学校からなる岡山県下で一番広い学区をもつ。最北端は鳥取県との県境に接している。学級数15学級、生徒数323名である。「知・徳・体の調和のとれた生徒を育成する」という学校目標のもと、研究主題を「対話的学びによる学び合いの授業研究」と設定し、学習形態ではタテ持ち指導・TT指導・少人数指導・グループ学習を取り入れ、自律(自立)した生徒の育成を目指す。「自分でものごとを考える力」「他者と対話をする力」「継続する力」の3つの柱となる力の育成に取り組んでいる。

落ち着いた学習環境のもと、明るく素直で活動的な生徒が多く、主体的に行事に取り組むことができる。

本校では常駐の学校司書が配置されて2年目になる。本の整備、図書館の環境が整いつつある。生徒が朝読書を行う時間の前に本を準備できるように開館時間を8時に令和4年度より変更した。貸出数の半分が朝の時間を占めている。生徒は朝読書前の時間、昼休み、授業間の休み時間、放課後に図書館を利用している。昨年度の貸出数は5148冊で今年は7071冊に増加している。1年間を通して1冊以上借りた生徒が84.8%を占めている。全体的に読書意欲が高い生徒が多い。

2 具体的な取組

学期ごとに図書館運営促進に向け、図書委員会でイベントを企画した。

- 1 学期…本のポップ作成, 図書委員おすすめの
本棚の設置
- 2 学期…読書インタビュー, 読書アンケート,
生徒集会での結果発表
- 3 学期…クラス対抗 しおり作成大会!

日常活動として「学級文庫」の本の選定と管理、図書館のカウンター当番がある。

(1) 「本のポップ作成」と「図書委員おすすめの本棚の設置」

「本のポップ作成」では図書委員が紹介したい本を図書館から1冊選び、ポップを作成した。出来上がった作品は図書館の本とともに展示を行った。また、おすすめの本を図書委員が一人1冊選び「図書委員おすすめの本棚」の設置をした。



(2) 読書インタビュー企画

図書委員の生徒が教員を対象に本に関するインタビューを実施した。各学年で誰にインタビューを行っていくか、どのようなことを質問するかについても生徒が考えた。そのインタビューの様子を録画して生徒集会で全校に紹介した。1年生は国語科の教員、2年生は数学科の教員、3年生は校長にインタビューを行った。インタビュー内容については以下のようなものである。

- ・中学生の時に読んだ本
- ・感動したシーン
- ・おすすめの本について
- ・好きな作者
- ・今までで一番本を読んだ時はいつか
- ・本を読んでよかったと思ったことは
- ・本を読むとはどういうことか

(3) 図書の購入希望・読書アンケートの実施 全校生徒に図書委員から各クラスに図書館で購入して欲しい本のジャンル、具体的な書

名についてアンケートをとった。そのアンケートを図書委員会で集計し、学校司書に相談して本の購入を行った。

「読書アンケート」では1日の読書時間について、どこの本を手にとって読んでいるかを調べた。

図書委員会でアンケート集計を行い、結果を生徒集会で発表した。

(4) クラス対抗 しおり作成大会

各クラスで、しおりを作成して、図書館の壁面に掲示を行った。

(5) 学級文庫の本の選定と管理、図書館のカウンター当番

本校では朝の8:25~8:35の10分間、朝読書に取り組んでいる。教室には学級文庫を10冊常備している。また毎月、本の入れ替えを図書委員が行った。本の選定も図書委員が行い、学級での管理を行った。

(6) 図書委員会の開催場所

本年度から月に1回行われる図書委員会を図書館で行った。学校司書も参加する中で取組に助言しながら委員会活動を進めることができた。

3 おわりに

図書委員会の生徒が主体的に様々な取り組みを考えることによって、より本への親しみが湧き、生徒自身の視点で全体に発信することができた。また、図書館で図書委員会を行うことで学校司書から直接助言をすることができ、取組をより充実したものとすることができた。日常活動であるカウンター当番では生徒と学校司書が自然と交流することができ、読書の話題につなげることができた。

読書インタビューでは生徒が実際に誰にインタビューするかを決定し、「この質問をしてみたい」と意欲をもって、活動することができた。また、先生方から紹介された本を読みたいという好奇心につながり、購入して図書館に置くことにつながった。

読書アンケートでは生徒の読書時間やどこの本を主に読んでいるかについて知ることができた。読書時間が15分以上であるという生徒が62%という結果より、学業や部活動等のすき間の時間をみつけて読書をしていることが分かる。

また、どこの本を手にとって読んでいるかについては本屋で購入している生徒が33%、図書館で借りている生徒が28%で同等である。この結果から、図書館の本を身近に感じ利用できていることが分かる。本のジャンルや最新刊の充実も図書館利用につながっているという実態をつかむことができた。そして、アンケートを基に生徒が読みたい本を学校司書と協働で購入することができた。

展示ではポップをつけて本を紹介したことによって、生徒の視点で本の面白さやおすすめ場面などを示すことができ、展示されている本を手にする生徒の姿も多く見られた。

朝読書については図書委員が主体となり生徒が選定した本を定期的に入れ替えることで、積極的に手に取り読む生徒の姿が見られた。

常駐で学校司書が配置されてから、2年目で図書館の環境は整いつつある。今後も本について生徒自身対話を通して、主体的に学ぶことができる取組を進めていきたい。そして短期的な活動だけでなく企画、準備、実行、発信ができるような広がりのある活動を増やしていきたい。また、今年度限りの活動にするのではなく、次年度も継続していくことで生徒の主体性がより育つと感じている。

近年一人一台端末になりICT活用も重要になっている。本の紹介の様子を撮影し、全体に発信するなど、委員会活動の中で効果的にICTを活用していきたい。しかし、本校の図書館にはWi-Fi環境が整っていない。図書館に端末を用いることができれば、生徒が主体的に活動するための一助となり、活動の幅を広げることができると考える。

生徒の主体的な活動による図書館利用の推進

岡山県立津山高等学校 教諭 立山 千亜紀
(研究同人) 岡山県立津山東高等学校 教諭 篠埜 順子

1 はじめに

本校は、岡山県北にある1学年普通科5クラス、理数科1クラスの高校である。生徒のほとんどが大学への進学を希望しており、真面目で学習意欲が高い。その一方で、与えられた学習には地道に取り組むが、主体的に考え、行動する姿勢は不十分であると思われる生徒も少なくなかった。そこで学校をあげて「VGR」V (Vision = 将来を見通す力), G (Grit = 最後までやり抜く力), R (Researchmind = 探究し、解き明かす力) の育成に取り組むことで、思考力・発信力を最大限に伸ばし、主体性を身に付けて積極的にチャレンジする精神を高めていくことを目指している。

2 具体的な取組

(1) 読書活動を促す試み

① 朝読書

本校では平成27年度より、朝のSHRの時間を活用し10分間「朝読書」を実施している。この時間は広く教養をつけるための読書の時間とし、特定の教科に限らない思考力や物事を多面的にとらえる力を養うことを目的として始められた。原則的に各自が用意した本を読む時間であり、教師も教室で読むようにしている。ジャンルは自由であるが、年次が上がるにつれて、関心がある分野の新書や研究書、学術論文を読み進めるようになることを期待している。高校に入学後、勉強や部活動で忙しくて本が読めなくなったという生徒にとって、貴重な読書時間となっている。教室には図書館から貸し出された1クラス20冊の学級文庫が置かれており、生徒が身近に図書館の本を利用できるようになった。

② ブックレポート (令和3年度入学生)

関心の強いジャンルだけでなく、今まで触れたことのない多様なジャンルの中からも本を選ぶ機会を提供することにより、図書館利用の促進につなげるとともに自身の進路実現に向けて自己理解や見識を深められるように

することを目的として行っている。朝読書で読む本は自分の好きなジャンルに偏りがちになるため、他の生徒がどのような本を読んでいるかを知り、視野を広げていくことを期待している。また、自分自身の読書体験をレポートにしてまとめることで、知識の蓄積を図ることもできる。方法としては、朝読書によって継続的に読書をするとともに、読んだ本についてブックレポートを作成し、月に1回の提出日に担任に提出する。担任が全体に紹介したい生徒のブックレポートを1枚選んでPDF保存し、係が生徒ブックレポートを集約し印刷して全生徒に配付する。生徒は返却されたブックレポートを手帳に貼付してストックし、変容の記録とする。

(2) 主体的な学びのための図書館利用

① 図書館リニューアル

本校の図書館は令和元年度にリニューアルを行った。図書館が対話的で主体的な学びの場になるように個々の机にキャスターがついており、自由な配置にできるようにしている。このような形態にすることにより、授業や課題研究などにおいて、グループ学習や話し合いをする場面でも有効に活用されている。

② 授業での図書館利用

保健体育の授業では、2年次に自分の調べたいテーマに従って、レポートを作成し、発表することになっている。レポートを完成させるまでのほとんどの授業が図書館を利用して行われた。教師や生徒が研究のために必要だと考える本が図書館にない場合は、岡山県立図書館から学校セットを一定期間取り寄せるなどして、自分の研究テーマに対する深い学びにつなげるように努めた。また、学校設定科目ソーシャルサイエンスや現代文の授業などで図書館の資料を用いて調べたり、グループで研究を行ったりするなど、必要な場面では図書館を有効に活用している。

③ 十六夜プロジェクト・サイエンス探究

本校では総合的な探究の時間を、普通科は

十六夜プロジェクト（iP），理数科はサイエンス探究（S探）と呼んでいる。iPでは，1年次にはミニ課題研究等の活動を通じて，論理的思考・論理的表現などの研究基礎力を育成し，2年次には自らの興味・関心・進路と関連する分野から課題を設定して，仮説・検証・発表を行うことで将来への研究目標を深め，問題解決力を育成することを目的としている。また理数科のS探では，3年間を通して自然科学に関する課題を設定し，研究を行うことで科学的思考力や課題解決に対する主体的創造的態度を育成することを目指している。いずれも確かな文献に基づく研究が必要であり，図書館はその研究材料を提供する重要な場となっている。研究が進行する2年次は自主的に図書館を利用することが増えてきた。令和3年度から導入されたchromebookで図書館の蔵書検索ができるようになり，調べ学習をする際に，対象の書籍が図書館に置かれているかどうかを確認して来館できるようになったことで，利便性も向上した。

（3）生徒の主体的活動

① 文化委員会の活動

本校では，文化委員が中心となって，図書館業務や読書を促すための広報活動，読書会の運営などを行っている。10月～11月に行われる本校の読書会は，企画から運営まで全て文化委員が主体となって実施する。令和3年度の1年次生の読書会では，「私を揺さぶった言葉」というテーマで読書会版ブックレポートを書いて持ち寄り，自身の読書経験を発表し合った。文化委員は，活動の様子を写真と共にまとめ成果物を作成した。2年次生の読書会では，本に関するクイズを実施したが，準備の段階でクイズスライドの作成やタイムキープも含めたりハーサルをこなし，当日は解説と豆知識の紹介もしながら，読書会をスムーズに進行した。

令和4年度の1年次生は，「読者の想像力でストーリーを完成させよう」というテーマに基づき，文化委員が選んだ本をもとに準備した文章を生徒が読み，その続き（または途中）をその場で創作（表現）し，創作部分とともに創作の意図や根拠を発表し合う読書会を行った。同年度の2年次生読書会では，前年度同様本に関するクイズを行ったが，各教科の学びに関連する形で図書館の書籍が紹介されたという点において，前年度にはない工夫が見られた。

毎年準備段階から生徒による創意工夫が見られ，活動の最後には文化委員自身によって図書館利用を促す声かけが行われる良い活動となっている。令和4年度2年次文化委員の振り返りとしては，生徒の興味関心を視野に入れた活動内容を企画した2年次の読書会の方が，1年次の時の読書会よりも盛り上がり，紹介した書籍に関して個人がさらに調べたりするなどの姿が見受けられたという。

② 保健委員会の活動

保健委員会では，毎年薬物使用防止キャンペーンの期間中に図書館と連携し，薬物に関する書籍を図書館に展示している。委員自身が読んだ本の中からお勧めの本をコメントを添えて紹介し，全校生徒に薬物使用の恐ろしさを伝える活動を行っている。

③ 図書部による活動

本校の図書部は，文化祭では展示や古本市を行い，生徒への図書館利用を呼び掛けている。また，ブックハンティングで購入した本を展示したり，季節ごとに図書部員が推薦する本を選んで展示コーナーを設けたりするなど，図書館の展示を部員が自主的に行っている。また毎年，新任の先生の推薦図書を紹介する広報誌「ライブラリ」を発行するなど，広報活動も積極的に行っている。

3 おわりに

朝読書やブックレポートによって，生徒の多様な読書経験を促す意味では，一定の効果があつた。文化委員も，文化祭展示や読書会の開催などにおいて，企画から運営まで自分たちで行い，図書館の魅力をアピールしている。また，2年次以降課題研究やiPなどを通して，自分の研究テーマに沿った本を借りることも増えてきた。しかし，研究活動のために図書館を利用することはあっても，図書館の利用者数が大幅に増えることはなかった。本を読むことが好きで，読みたいと思っている生徒は多いが，時間的な制約もあり，図書館に足を運ぶことができないという現状もあると考えられる。

心をつなぐ絵本 ～SDGsとつながる絵本～

倉敷市立福田南中学校 教諭 山田 宏美

1 はじめに

岡山県学校図書館協議会絵本研究部会では、「心をつなぐ絵本」という研究テーマのもと2021年度より「SDGsとつながる絵本」をサブテーマとして研究と実践をおこなってきた。

2015年国連サミットで採択された持続可能な開発目標は、2030年までに17のゴールが設定されている。現在、日本でも多くの企業がSDGsを意識した取り組みを実施されているが、目標達成をするためには、すべての人の行動が求められている。未来を担う子どもたちが、世界にはどんな問題があるのか、問題を解決していくためにはどんな取り組みをする必要があるのか、ということに意識を持つためには、何らかの形で触れさせていく必要がある。

一人ひとりにできることをしっかりと考え、行動するために、絵本を通してSDGsについて学んでほしいと思う。

2 絵本の紹介

「SDGs」をテーマとしたブックトークに選んだ絵本（『読み聞かせたい絵本』掲載本を目標別に並べている）

◎ つくる責任つかう責任

『いのちのたべもの』

出版社：おむすび舎
文・中川ひろたか
絵・加藤休ミ

今日の夕ご飯は寄せ鍋。お母さんとスーパーへお買い物。はくさい、とりにく、はまぐりにがんもどき。たくさんある食べ物は海の食べ物と陸の食べ物とに分けられる。「人のからだは食べ物でできているの。」お母さんが話してくれた食べ物の話。読むと今日のご飯がおいしく感じられそうな食育にもぴったりの絵本だ。

『たべる たべる たべること』

出版社：おむすび舎
作・くすのきしげのり
絵・小淵もも

一人の女の子の成長を見つめながら、たくさんの「たべること」を通して、大切にしたいこと、伝えたいことが、幅広い世代に向けて丁寧に描かれている。「たべる たべる たべること」のフレーズが繰り返される、あたたかなリズム感も素敵だ。

『life (ライフ)』

出版社：瑞雲舎
作・くすのきしげのり
絵・松本春野

町の外れにある「life」という小さなお店。訪れた人たちが、今は必要ないけれど捨てられないものを持ち寄って、気に入ったものを持って帰るリユースのお店。最愛のおじいさんを亡くして悲しみに沈むおばあさんの心に、あたたかな明るい風を吹かせたのは…心温まる作品である。

◎ 海の豊かさを守ろう

『プラスチックのうみ』

出版社：小学館
作・ミシェル・ロード
絵・ジュリア・ブラットマン
訳・川上拓土

人間が出したプラスチックごみが、海に暮らす生き物を傷つけたり命を奪ったりしている現実を、美しいイラストでリアルに描写している。きれいな海を取り戻すにはどうしたらいいか、読み聞かせの後みんなで話し合ってみよう。岡山在住の小学生の男の子が、韻を踏んだ素晴らしい翻訳をしている。

◎ 陸の豊かさも守ろう

『めぐりめぐる』

出版社：ポリフォニープレス

作・ジーニー・ベイカー

訳・わだすなお

長い長い距離、北極圏から南半球まで1万キロ以上も移動していく渡り鳥。しかし地球環境の変化で、羽を休める干潟はどんどん減って……。自然への畏敬、生命の尊厳を深く考えさせられる。構図のすばらしさ、緻密なコラージュにも見入ってしまう美しい絵本である。

『森のおはなし』

出版社：六耀社

作・マーク・マーティン

訳・おびただす

むかしむかし、あるところに林があった。その林は深く生い茂った森になった。その森の木を人間たちが切り始め、森はビルや工場に、そして都市にと姿を変えていく。そうして残ったのは1本の木。1本の木から始まる自然のお話。自然の力を考えることができる一冊。

◎ 平和と公正をすべての人に

『へいわってすてきだね』

出版社：ブロンズ新社

詩・安里有生

画・長谷川義史

小学1年生の男の子が書いた平和への思い。純粋で、素直で、力強いまっすぐな願いを、今の日本に、そして世界の人々にひとりでも多く伝えたいと、長谷川義史さんが絵を描いている。「へいわって なにかな。ぼくはかんがえたよ。」で始まる、平和へのメッセージがかかれた作品である。

『もっとおおきなたいほうを』

出版社：福音館書店

作・絵・二見正直

王様は先祖代々伝わる大砲を撃ってみたくてしかたがなかったが、戦争がないため撃つことができなかった。そんなある日、ひよんなことから川の向こう岸のきつねを追っ払うために、大砲を撃つことになった。逃げていったと思ったきつねは、もっと大きな大砲を持って現れる。それに負けじと王様も……。ページをめくるたびに驚きや

笑いが起こる一冊。そして何より平和が一番と思わせてくれる絵本である。

『せかいでいちばんつよい国』

出版社：光村教育図書

作・デビッド・マッキー

訳・なかがわちひろ

ある大きな国の人々は、自分たちの暮らしほど素敵なものはないと信じていた。その大きな国の大統領も、また同じように考えていた。国をもっと大きくして「世界中の人々を幸せにするため」に始まった戦争。最後に残ったのは、小さな国だった。そんな小さな国が教えてくれた平和の大切さ。戦争と平和について考える絵本である。

◎ パートナーシップで目標を達成しよう

『おじいちゃんのがのこしたものは・・・』

出版社：評論社

作・マイケル・モーパーゴ

絵・ジム・フィールド

訳・佐藤見果夢

おじいちゃんが残した、孫娘のミアに宛てられた手紙。ミアは母親になった今も、クリスマスになると家族と一緒にその手紙を読み返す。地球に生きるすべてのものが幸せに暮らすための願いがぎっしり詰まったおじいちゃんの手紙。SDGsについて考えるきっかけにもなる、心に響く一冊である。

3 おわりに

世の中にはSDGsについて触れている書物や商品、取り組みが溢れているが、SDGsにあまり関心のない生徒や、よくわかっていない生徒はたくさんいる。少しでも多くの生徒に関心を持ってもらうための働きかけとして、絵本の優しやわかりさやすさを使って生徒に関心を持ってもらえるように活用していきたい。

子どもたちが絵本をきっかけに、自発的・主体的な学習活動を支援するとともに、問題意識をもって学習に取り組む姿が見られることを願って、紹介していきたい。

大会役員

会 長	倉敷天城高等学校	校長	藤井 省吾	県SLA 会長	高教研学校図書館部会 会長
副 会 長	高島小学校	校長	藤原 陽子	県SLA 副会長	小教研情報教育部会 学校図書館部 会長
	光南台中学校	校長	川原 悦子	県SLA 副会長	中教研学校図書館部会 会長
代表理事	水島工業高等学校	校長	森 尚貴	県SLA 倉敷ブロック 代表理事	高教研学校図書館部会 備中地区 会長
	総社高等学校	学校司書	大西 結美	県SLA司書部会 会長	

大会実行委員会

委員長	水島工業高等学校	校長	森 尚貴	県SLA 倉敷ブロック 代表理事	高教研学校図書館部会 備中地区 会長
副委員長	琴浦中学校	校長	中川 博之	中教研学校図書館部会 倉敷支部 会長	
	里庄東小学校	校長	土屋新太郎	浅口支部 会長	
	陶山小学校	校長	荒川 光平	笠岡支部 会長	
	山田小学校	校長	平田日出子	小田支部 会長	
	荏原小学校	校長	斎藤 正幸	井原支部 会長	
	維新小学校	校長	風早 千帆	総社支部 会長	
	成羽小学校	校長	日名 進	高梁支部 会長	
神郷北小学校	校長	棟森久寿美	新見支部 会長		
総務部	琴浦中学校	校長	中川 博之	倉敷支部 副会長	
	中島小学校	校長	濱口 隆生	県SLA倉敷ブロック代表理事	
	山田小学校	校長	平田日出子	小田支部 会長	
	柏島小学校	校長	三宅 貴恵	倉敷支部 副会長	
	柳井原小学校	校長	平尾 嘉克	倉敷支部 副会長	
	高梁北中学校	校長	武田 浩充	高梁支部 副会長	
	成羽小学校	教頭	高野 松美	高梁支部 事務局長	
	哲西中学校	校長	藤野 哲久	新見支部 副会長	
研 究 部	万寿東小学校	校長	佐野 薫	倉敷支部 副会長	
	老松小学校	校長	横溝 敬司	倉敷支部 副会長	
	琴浦西小学校	校長	高橋 宏徳	倉敷支部 副会長	
	里庄東小学校	校長	土屋新太郎	浅口支部 会長	
	陶山小学校	校長	荒川 光平	笠岡支部 会長	
	荏原小学校	校長	斎藤 正幸	井原支部 会長	
	維新小学校	校長	風早 千帆	総社支部 会長	
	高梁東中学校	教諭	上原 和賀	高梁支部 事務局次長	
	神郷北小学校	校長	棟森久寿美	新見支部 会長	
	刑部小学校	指導教諭	池田由加理	新見支部 事務局次長	
会 場	天城小学校	校長	高岡 誠治	倉敷支部 副会長	
	水島小学校	校長	水城 弘之	倉敷支部 副会長	
	成羽小学校	校長	日名 進	高梁支部 会長	
	哲多中学校	教諭	中尾 温子	新見支部 事務局長	

県SLA事務局

事 務 局	高島小学校	教諭	高角 彩歌	小教研 事務局長
	竜之口小学校	教諭	副島佳成子	小教研 事務局長
	竜操中学校	教諭	門田 琴音	中教研 事務局長
	高島中学校	教諭	田中 杏佳	中教研 事務局長補佐
	倉敷天城高等学校	教諭	坂井 昌子	県SLA 事務局長
	倉敷天城高等学校	教諭	小野 貴子	高教研 事務局長
	倉敷天城高等学校	学校司書	横山 雅子	県SLA 事務局員
	倉敷天城高等学校	主事	永山 友香	県SLA 事務局員